

# 清少納言旁註 二（天和元年版）

楣山文学園大学デジタルライブラリー

楣山文学園大学図書館





89B2058

卷之三

出でしはまのうち我門も承友とせらるる

乃の事はと確に國事の所為なる

卷之三

卷之三

軍事をもとめの事をうばはるんとあよおへ  
延文西風  
軍事をもとめの事をうばはるんとあよおへ  
寫ナシテハナシテアラムとあらへるが、アラムのあつ船ボウのすゑで  
老シテふねヌメくわ。

梅聖喻詩最好音色最好聽似調古更口寧高枝絕過  
低枝西金羽脩眉黑染銅

この宿湯かうゆは水のゆらいで聞ゆるてあらわすや  
内裡のうちかすりぬだいをわうとせらあうぬぞいとおひとまわ  
ナセバナマハテ同シラセヒム音もせばウタ  
夜 寢心地

王汝玉出左掖園鶯落盡飛花滿林城  
方年枝上一鶯鳴  
官鶯嘲曉光題孤鵠自為心弓曲中後所破竹裏音  
孤鵠之寄景鵠也中後坐震翁之

而あむびとを本むけに仕の太ま人よ初者もて  
相模お詫すあげてくらべば十日下中等を定すよほ  
内裏は行のしとくまうばく一と申すが御云う事はいぢり  
えんわばく

今上

卷之三

高木の山に生る木々の根は枝は皆もあらず

清涼殿也

清涼殿也

林中と退出

けやあやーの袖の中からーをは  
の音。

はやくあくゆきす  
和音

めでてそれのみがうどむはれとおもひやねがを自らうじ景物も  
鳴かざすの夏もああよかとぞ  
むきよらへるまのとりとくらうほりまくわゆのきばれ  
夏秋が来そかる也  
人らへかへべくもとがて鳴のあべうよみだせ  
おもひだるよしのくのまわらん人やある

是むるもくもや 鴉 薦  
ものゆきとくのふかひとく人やある。嘗て第

黄鶯子に如葉

1

三

三

此卷之友也。此卷之友也。此卷之友也。此卷之友也。

はるかの後嗣の御代に於て御名を承りけり  
まことに御代と申す。御名も御代と申す。  
帝と申す者と申す。御代と申すが。おおひや御代  
この御代が御代と申す。御代と申す。

物の本。すなはち鏡と名前のうへて、鏡なり。鏡も、うへて、鏡なり。

あくあくと。それよりこの世の居る所とす。  
山中やねがどりと必峯を傍てゆけや。ふよしとひだ。難波尾  
とおびて。まくべて。かどりのねと。底ふのとゆら波  
くみよしと。又ゆるの尾ひと。おおのとうかうと。山あ  
の雄ちと。うち尾と。ゆけや。おへや。うつや。事と。湯  
よもハ。雄すすむや。おれも。きよめくわせてよある。  
又けすれうふうをじめ。ぱううに。かうみかく。よもくも  
よもくも。うめ。と。うづみ。唱の字や。

其音 大キナル也

つるをうらと。ゆきがくと。うくと。あめ。うで。因ゆんと  
めでゆ。

李淳丘伯相鶴經。財尚潔。故其色白。卽天。故頭赤。食於水。  
故喙長。翔於雲。故毛豐。而肉疎。大喉以吐。故修頸以納。薪。故

大壽不可量。下畧鳴則聞。天飛則。一舉千里。鶴百六十

年。雄雌相視。乃一千六百年也。

内舊の事

からあくとすめ

からあくと。上の文へと。並と。くと。まくと。あくと

いはぐのも

崔禹賜食經云。鶴伊加留加。貌似鵠而自啄者也。

無名氏。註。班鳩和名同。日本紀。

一説云。鶴子鳥。またある人の云。鶴あまと。つるのと。ゆはゆ。

おもひのうへておもひのうへて

まことに思ひがまかず心事あるあいのうの声

卷之三

啄木鳥之介雅ニ 獅木スミ 一名鴛クモウ 和名天良豆アマリド、木食樹中蟲也キシキツノムシヤ

留長數寸勁如鐵丁々亂鑿乾枯查  
キハナニロオホシキニシテ王丸之クセ言の句也

ゆきやかば。あらわの名づくべ。但源流が和名

の如き多々あるが、とてはぬ。本多はひぬるをばく

之別一一名鷦鷯也。自閩東謂之巧雀。又謂女通。一作女通。

と小室と付近の山並みが見え、このあたりは

すら能このふとゆづるゆ也。まじめ文ひ御上御下御八事不

のすゝある。まことに金羅。陳已者。王尤之。りうのほ。和彦

引合て啄木を巧鳥と定めりや 本草も和名細詮

考の事。啄木の嫁も一物のものか。因縁も

喙來以爲之多入多譜篇回一通言之以序者固

眉目 眼睛居の字眼の字

近江高嶋郡

豈か無目づかぬ事あらん。」とおもひた。

余  
・  
・

卷之三

謹の事目が御用事の事あつておまかせ申す

眉目

眼睛居の字眼印の事

近江高嶋郡

豈か無目づかぬ事あらん。」とおもひた。

属玉とひてきよめのことを書く。書名を名付。のちは高橋とす。  
のまことかとてる。つるうすてみめわらーときあら。

又眼がのる。わきてちもあはりのんとおぼつかず。

寔化論。鷺の眞盼而受胎（アマコト）とある。鳥々やがむわがわ  
をいとねや。ぐみよかうして。ものとあわせととあんがどくす。  
本草。鴛鴦終日並遊有宛在氷中央之意也。

寔註。雌雄未相離。人得甚一則一相思而死。

くみやうは色のとほとじとみのとせいかきよく

まめり

ハあめの家をとくとあくとくとくとく

雄略を宣せぬ。勇略のふよおえのじんとし人の婦を絆  
あひてゆきとひて。雄略を宣せぬ。勇略のふよおえのじんとひて。

名を  
二ふう遠山のじくみのあみ明めと若るをとくのく

●あてあめの 貴賤妙のとまあるをとまじやざやせ  
白シロ重ヂヤウ 江松エイツ  
うすめよしのかまねあくさみ

高タカ 翠スミ 来キモチ のちよ 経紫緯白 又説緯白緯青レ

向重 更衣の時アフタマのくわいのせ。毛衣のあく。是、袍の裏アラシ白  
と重の高タカを。白襲カサ着裏ヲモラシ白半袖更衣ヒラマツは上下蓋アラシ、  
がみを衣よせたまふの

あばのわあまつまつて。あまつまつあまつまつ。

けいれん 細巴の挽 手のと前もや

江波少女 新任大臣 大饗食スム。蓋看物暑月削冰甘夙等スム

同五列見首書シテ粉熟又加削冰列見延礼及暑月スム

あまつ 千歲薑汁本草味甘辛無毒續筋骨長肌肉

一名薑薑 薄敬註即今之薑薑藤汁是也和名アサツキ良

木朝式ニシマツシタ甘薑蒸也あまこ事アマコモノ也

スミモ 和名 金椀 日本靈異記シテ其器皆椀俗云

和摩末利 古语謂椀爲摩利宣用爲金椀也

楊のげのふをりゆきる。いみじうじうらららのひごひご

るのと すゞすのす

●ひく

金鐘虫

すぢし

蝶游虫アゲハ

もよおし

促織

絡線娘

蟋蟀

まよひ

蜘蛛

まよひ

蜘蛛

まよひ

元誠じし

●ひく

螢

唐韻比字無之朝生暮死虫也

ほくかみのじへとあらは。思のうみくわあやまゆて。ふくとあそ  
ろしきこくうぞうじとて。あやらあめしきとぬ引きせく。いゆ。秋  
風ゆんおりすそ。あんずるよども。いゆて。よびて。いよきくとあそび。月  
のきと國をもて。星有ばくふあわぐ。らうくとほくかげよかく。いよ

うあつむ

八雲が説鬼の子の心とあら ちや草間

かくの云ひのり、鬼とんがらぬふてふと衰えてゆきや  
秦  
萬人魂のうちよもむきて枯風あひみのびーのふ  
もぐらし めづとじーまくあらわや。  
宋蓮

傳咸叩頭虫賦云 虫之細微者触之叩頭 叩頭虫奴若豆木  
居 さゆううわよな心ねうてゆくわくらんまくおひしげすくもとを  
ノロギめきあつてゆくおくれ 魂 ほくそくみくみゆくらふ  
居 神経 外の見えくらふすとらじい  
つまはれあいまやうかふきのをへくしいうかさいづべ  
えのやうふくわねどらうげのもおふねりかくよめがくわく  
居 列子ます隠とふ名ある 望又あくびきれ難の事  
わくわくら人の名ふくらふくらふくらふくらふくらふくらふ

楊子方言云陳楚之間謂之魄。一名波团。庶人之名也。  
次陽公之憎於蒼魄賦之心也。魄也。又云。蒼魄。吾  
嗟爾之爲生也。万物之氣也。逐氣。尋香。無處不到。  
氣也。又云。魄也。尋頭。撲面。也。又云。魄也。和淫  
之氣也。也。楊之口。口。也。也。

友虫をもつてや。父もひー。蟹蝦取いづきもあがやる  
うりべど。うのあつじー先輩あくす。すこよむとひ。蟹  
とまつむする。船とあハ橋のとくびゆくはつりくら。蝦  
とく魚ハ。おえで。おのとくとくも。おのとくやくも。

かく、實のうへへ少林の事とある。

蒙古文

この蟻水る水鬼といひて。せよひもいふとひの  
水上とあめしもの。本草水鬼のりよ水鬼羣遊水上  
水洞飛長寸許四脚非海馬之水馬也。又蟻の下よ大多く  
蟻も蟻どひど也。水るとも蟻へあがへりぬうひか  
水ると蟻と計古事小や

水鳥と蟻と計古原小也

強

七月。すの風の。ひとうぬき。雨あ。のと。バ。ま。日。お。か。く。と。下。り。く。  
扇。あ。ま。れ。ま。ふ。汗。の。う。す。一。り。く。く。ま。ま。の。う。す。ま。ま。く。く。ま。ま。く。く。  
強  
香抱

新編  
古今圖書集成

卷之三

清江源頭水

タチ  
もうつる赫蹠といふのである。これあると紙の名前が孟康  
云々、蹠猶地也。染素紙、今赤書きのものである。

紙より筆を以て書する文章とやうなふふうの筆を今  
は多く編集せらる。正筆は論文をもつてすとく、  
がじづく事のみれあへて紙のちやく秘意のよや。

右馬余情云、左湯門曰、初負、初負を矢と入向ととひ  
のや左湯ハラスと常丁合つてああよりてゆび

ソヤシのゆど看督長の廻りの也。かの長ハ赤の被衣  
白羽の袴を着。首杖雜人絶連携する也。

車駕出行先按行及道邊隱映處檢索非常前後叱呵觀人木  
言登高者使下若在所幸皆先防禁門巷是外諸門警固

之侵也

人よおうと向うのまねはとねりくらへうと西うす。人尼つ事  
もわがづく。あんまりやわらとあんねりもどく。 恶アシ  
娘マサニ。うぶはまの御あべじひ。戯ハタチ。 本ホン。  
ち翁跋文して。湯門翁ちよ。此事といひじゆつをあらば。  
今よ過る也。湯翁を相面派五位翁もその抱赤翁。  
て。目がくと落あがむ。おもろくとくとく。 源氏水籟。

あるむこのゆげあやめあゆ

此處人うの判官とうひひて。うちかくまづくとあらわす。  
あらわす。下の事あらわす。下の事。この世人おとこよもひます。目とふるあ  
はざわか人の。内うちからほそとのかどゝものひて入いか  
いか。

お詫花人と。御員が尉をどのお詫花人派多ひか。よの判下  
とを。詫花人乃湯<sup>タニ</sup>尉<sup>イシ</sup>。檢非違使のせうよ病<sup>ヤク</sup>あせりや。  
よのこハ届上せりや。檢非違使乃尉の昇殿をまわらる。

事あらど。是を御へあはぐ。黒巣より詔也。勅命由判下。性程  
グ一、  
玄城使ひ判下を侍候も。ちよひあるが様非違使のう  
スリ

治定すべし

あ候非違使の様なめくしとてあ  
をかみのへんかう。どうあきあげの。おもげよいか  
うきくしむよ。おげよ。おぐら

く。おまかせ。おまかせ。おまかせ。

いはまの心也。  
ぬけも 袍(羽根の袍の事) かくざき(古事記)  
ぬくよ。うのとぬわをあけねずみのおのやうみてわざの御もとし  
夜行(夜行) 美人あ朝室やくを向ひて肉がちてあひあひは寝意せよ  
かど。ぬけあさやか東北人くなむ。このつとのれどをゆんじて

在處の爲めに五位の義理を  
うへ。ふほの義人を。  
かとあり人とあらざれ。あらむの屋  
ゆやすくは。よせものがくす。まぢげあらかと小ちんや  
あどがくまきしめくわう。まねどもはくまきしめくわう  
はくまきしめくわう。まねどもはくまきしめくわう  
ありくと。あぐとどく。はいゆくさふげどのとくはく  
えあひじき。うちゆゑひ幹。又高まある。いわく。いわく  
車。とけみ。やくじりて。あくびくつ。おとむくわく。いわく  
ち。のくじうとくくし。月夜ふしが向ぬあらざる  
まうげかふねとおふげからめむく。おげくわふく。おがく  
人のむ。おのむ。おのむ。おのむ。おのむ。おのむ。おのむ。

禁秘抄主殿司方人。職原抄云近代十二人。華族幽玄  
送日 按華族幽言者華族末流幽微之人也仕之  
下すゆゑあるづきが多きあると  
あむせのよしとげるうや浦一きものばかり。うつてよせを身  
ゆびきわざや。わくてくらうりんばのよどてあん  
空窓 形する  
をゆてらうし。ゆれてくみのゆ候ふやどりて。あむ  
さゆくゆくゆくゆくしゆめやす。とみゆればきらりと  
あいだやうばくまくじとりて。ひうちくせふとくじて  
あむあむいゆめりうて。あむせざわとくとゆく

袖口大廣曰衣袖口小限手出入曰小袖唐衣者大袖也。女孺不着穆惣一切女房服者高下卑尊踏皮素足也。

色刀自衣上<sup>ノ</sup>及唐衣<sup>ヲ</sup>女孺者不<sup>ニ</sup>良<sup>シ</sup>也袖<sup>上</sup>及唐衣<sup>ヲ</sup>  
唐衣者袖<sup>リ</sup>身<sup>長</sup>皆短者也女孺驅使者也及<sup>ノ</sup>及唐衣<sup>ヲ</sup>

女孺涉<sup>ル</sup>中<sup>ノ</sup>掃除核油<sup>ホ</sup>役也  
貴め其<sup>ノ</sup>居随身<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>あらわす所也  
あくともまこと隨身<sup>ト</sup>であらき。ひだりもむかしのうおとよほりを  
も隨身<sup>ト</sup>もいはむくし

隨身前<sup>ノ</sup>參<sup>ム</sup>也。隨身<sup>ス</sup>あ様<sup>アラ</sup>本府の隨身<sup>ト</sup>小隨身<sup>也</sup>  
小隨身<sup>ハ</sup>家<sup>ノ</sup>仕事<sup>ヲ</sup>かうむはれ<sup>シ</sup>也。本府隨身<sup>ヘ</sup>免<sup>ム</sup>  
あくとべつに<sup>ハ</sup>まぬや。中<sup>ノ</sup>ねかね諸衛の督<sup>カミ</sup>候<sup>フ</sup>にて。  
花旗<sup>ハ</sup>の内<sup>ノ</sup>免<sup>ム</sup>事<sup>ハ</sup>ぬと<sup>シ</sup>て。公達<sup>モ</sup>隨身<sup>アリ</sup>  
をり<sup>ク</sup>ー<sup>シ</sup>也。

随身<sup>ト</sup>あくまち<sup>ト</sup>は<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>と

職原辨士人官中事大辨取執行也仍爲重職名家譜代  
輩殊依清撰<sup>ハ</sup>花旗之中有才名之輩參議之時<sup>ハ</sup>變  
爲規模無文才不居之也名家者廣橋萬九柳原甘露寺万里小路  
中御門也

左右大随<sup>二入</sup>左太中弁<sup>二入</sup>左少<sup>二入</sup>又中少<sup>二入</sup>同

權官一人必置之<sup>ハ</sup>仍謂之<sup>ハ</sup>隨<sup>ト</sup>

も<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>み<sup>ド</sup>く<sup>シ</sup>て。隨<sup>ト</sup>身<sup>アリ</sup>を<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>や。

裾<sup>ハ</sup>下<sup>タ</sup>襟<sup>の</sup>處<sup>シ</sup>一<sup>ト</sup>そ<sup>レ</sup>あ<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>も<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>時<sup>ハ</sup>往<sup>カ</sup>る

よ<sup>シ</sup>て。も<sup>シ</sup>け<sup>ア</sup>て。若<sup>ハ</sup>一<sup>ト</sup>そ<sup>レ</sup>ト<sup>ダ</sup>ま<sup>ハ</sup>ナ<sup>ト</sup>り<sup>シ</sup>れ  
よ<sup>シ</sup>か。長<sup>ミハ</sup>代<sup>ミ</sup>の劣<sup>等</sup>不<sup>同</sup>也。沮<sup>ミ</sup>を<sup>ハ</sup>接<sup>カ</sup>家<sup>ノ</sup>用<sup>本</sup>高

を御<sup>ナシ</sup>るか八尺也。大臣ハ一丈。國白<sup>ヒタチ</sup>ハ一丈二尺也。  
大臣<sup>立</sup>  
<sup>部</sup>大臣<sup>くわい</sup>くわい。大臣より、下議院の大臣<sup>くわい</sup>くわい。

職御曹子 中玄定子のぬきが御處や。ロモの思ひあはれ  
ゆ一ノ子西也。

歌の弁りへとまわる。久しくあらうが

左中將後五位下。義孝の子息。正三位太宰帥。承大納言  
行成卿。後一系院。万壽三年二月薨。五十六能書。三蹟内

男權記

贍事補任

益人前左衛門擔佐同二年正月廿五日民部大滿四月廿四日

宋史中辨

お出でされはおまきりよ。御内侍なるとのこすあがくわ  
おめの事も御心を  
おひき。大歎みば。うそとまことのひとつも。しがく

十一

職事補任曰左大辨藤懷忠永延二年二月廿七日補之

又在大朝簾有國永祚一

右の大弁を、ひそめうるを  
おもとす。居をよきよきおのぞき  
のり成るゆゑ 大弁と内傳表裏  
あらう事だより。どちへづれまくせんそくをせかくふなは  
情事おもて  
おもてと清少きよすとの中 定名を失ぬまゐなを  
空のこまひ。いづれともみゆて。ありまさす。じかどあてと西事  
事

戦国策曰、晋豫讓アキラが士ジ爲スル知ル己ヒ者ヲ死ス女ハ爲スル悦スル己ヒ容ス  
この語ハ心チと先儒セイガクの解タメ是シテ其ハ眞情ミンジョウ也ヤ

家より心事書か綱をよめぬ者を以てんもの  
を乞ひ  
とゆきあらひのを西やうとせし室。じゆくりてあらふ、  
無

あがいぬかがくのまじめのをうながすや  
アハナケモシタムシ

論語學而篇過則勿憇改之の句乃より

冬の直衣とハ四季の着物ある所よ多喜よわざれど着宋  
袍<sup>おろ</sup>を冠<sup>くわふ</sup>る事<sup>じ</sup>、うれし。更衣のうちやあはく一<sup>いつ</sup>てよろしく。又  
うれし。このいぬぐひよりて、平生の束装<sup>そくそう</sup>はうのまゆ下<sup>しも</sup>のうき是袍<sup>おろ</sup>より下<sup>しも</sup>のねの<sup>の</sup>まゆ



のうそと  
りの抱で冬、教隆の名の字をもつて  
と高き児やばのうごわくかめりとおひそ。名もいふく  
史のうえよきまき。お成の笑が  
だるいから。おもむきあらうかのうけ。おもむく  
おもむく。  
のうそと  
りの抱で冬、教隆の名の字をもつて

わざとおもひをあつて見やうなば。ゆうぬくやや。あくまうとやひひさうそ  
リテ引かぬ。——くらむと。眼のキモとおひきれでくすド。  
（おもひをあらはせ）  
（ゆうぬく）  
（あくまう）  
（ひひさうそ）  
（くらむ）  
（おひきれ）

とおつものよしにうらめ。おひくよるわざの高人をあきらめ  
じききてわざとくわざとくは、わちひそひうらめ。おひくよる  
おけあうかやのこころのわざとくわざとくわざとくわざとく  
わざとくわざとくわざとくわざとくわざとくわざとくわざとく  
わざとくわざとくわざとくわざとくわざとくわざとくわざとく

あくやかんとらむとせば、あら人のつがねり経て。うらまくして  
清夢寝起のふかずをやまとを  
天子中古  
おひめのわすれぬ。まづうのかけづるがう  
お感の見てあるゆ

まかせしり  
名謁

名 謂 是 す ち 名 が め の あ ま つ き あ ま う の う け あ ま う の 犬 か ま う

さうせしり  
名謁

名謂是うゑふるをよみてはるひあらし

名器画を。廻上小とのおせひ侍に。あがむよ名ととりひめ  
名のうき。北山妙云六府次將緊一貞近衛供奉。裝束同様  
其外主司。軍中少將者帶子箭供奉入御之後。王卿名對面  
官司向之諸衛不脫弓箭着饗座。

侍昌翁  
前まくわらを廻てよもやう考へてくづき  
づきとくのほばむのもんじよもやうがをとくてよもやう  
あるあくへん  
まくわらをくづきとくてよもやう  
ふほ人の名のりへき。よもやうはよもやう。よもやうありとく

九





清菴  
あらへ人の家の門の前をわゆる。まことにあらへす。  
跡やま里  
ひめこゝにあめとつらよ。わゆるきどりて。おのざの十どうあらび  
辻又土也  
みおうびあはりとほくらむ。かくもくじへあむまむくはむじつ  
延  
あさき出益也  
げりあゆびりてくびのかよ。うるおとけりとあらう。あらう  
がくのゆ  
あら。あらーとゆみ。あらびりてあらのあら。ちげくあら。あらう。  
膨  
くらまくらて。くらまくらて。くらまくらて。

答 唐全云答大頭二分小頭一分半。是淺のせり  
起て斜人とうつものや。棘あるを山椒そすら枝也。

ゆくらでひまくあそぶの香り。みじきうつむかひ。おとこよ。  
柳樹も。春三季。あくまでも。あくまでも。あくまでも。  
うちも家は中門あけて。ひらり。あのうり。あくまでも。うげああ。い  
けす。柳のあくまでも。あくまでも。うげああ。あくまでも。うげああ。い  
めてもうれ

音近二ノ 唐韻云和名之知床也字彙云榻狀狹而長者也

車とすてをくものや。くうじのやうかほものや。うしをく  
車供奉のせ。下襲（据ラキハシカミ）。あ思がうてくらうまへ。  
左位右位をの。さくがまねりどもとまみて。そのひもをうさぐこくらう。  
さくがまくらへ。うさくまくらう。うさくまくらう。  
規模（ルモウ）隨身を供奉するものとて。  
きのよ。隨身のち入（アリ）。あ。いわはまぐ。

西官記諸衛將佐有漸出之時屬垂胡簾也



奥州裏達

なむせじよへはこそみづよ。智者諺とまく  
とくのあさきをいふ。アレアモアモト。

越前又兵衛おひで  
わさじつのは

・げを

金子多代がうまうぶ。越前のか尖種とど居候のすまうア  
あさじをいふ。金のすまめり。もう日の序もて。このものすま  
あらへ。今ハあさじのばーととく。行。文字ミテ活生也と  
あらへ。はよりく行。アラハ。活字の体。アラヒ。活字と  
きてあさじとうちやう。あさじのうへ。あさじばのう  
のうへ

接觸長柄

脛筋天彦

近江源名

接觸文房

上野信望

大和安ト

接觸裏橋

奥州稽查又小河

さのくねは

下野瀬田

接觸崎路

接觸堀江

かくはー

セキのそー

接觸岐阜

接觸山管

三木のそー

答

接觸源名

接觸文房

鶴のそー。雲がみはの。支本が国防を任。畠井佐  
淮南子より高麗傳。國務度。歎也。あさじ。家持の。  
めう。防ぐ。そーへ。天の。も。や。百人。三三。そー。す。ま。る。  
や。れ。あ。じ。の。そー。そ。り。そ。り。ぬ。け。や。非。良。西。一。さ。ま。る。

室惠ミタニ

下野山管

筆志助

山す。あ。の。そー。一。す。じ。わ。ー。あ。あ。か。は。か。勢。

せとねじと國よがりま。うあむのそ

あれど。りうちも櫻のやうのひめをうけ。まき

櫻よみかばる。拿のほづるはーと  
鳥居大洞。資慶郷。うべーと。わらふのむくらうさ  
し。高橋。ばくあらゆと。かーと。さげのひやと  
はくまさせぬ。

●里を

あまの里

ハ雲のう後。清か納。引てをひ。言ひはるの傳  
第の多。をを減。おな。かと。の。西。おせ。わ。と。あ。さ  
の里とあこめて。奥。あ。の。山。が。め

長雨未幼

来見伊勢

他未未幼

頼里信別

あ。の。あ。の。里

和州本多風の里

丹後夕陽

人。ほ。下。の。里

伏見歲

あ。の。あ。の。里

南河の里

大和十市

ト。海。う。み。と

か。の。と。

播磨長居

奥州妻最

あ。の。あ。の。里

諸

かづわが里

津西。ち。の。里

と。う。み。と

か。の。と。

と。う。や。う。ん。い。づ。き。む。か。

●草を

菖蒲。草。癸

ま。そ。草。頭。

ひ。う。ぬ。ぬ。も。あ。か。む。は。と。お。り。お。の。ゆ。か。が。

諸道具。三。り。く。房。葵。の。ま。や。

と。う。の。う。ん。と。う。め。め。と。あ。と。と。と。と。と。と。

葵。部。の。多。よ。へ。く。あ。か。う。づ。う。絵。無。ひ。や。む。義。お。尾。ひ。社。司。

前。日。よ。う。風。え。ま。西。を。風。四。月。申。の。酉。の。日。セ。の。あ。書。禁。

ニ系多めう多事とふや

澤浮  
おももくも名のよしもや。うちあづりーくともうす

面高空ふらはぢしきとよしなてかへよ。

曲禮曰凡視上於面則敷此序字呂氏註知其不能下人也

ナリ  
ひらしろ

ナリヨ 茄菜三稜・宴九利とちる。和名類聚本草、城引

三稜草

本草又ハ荊三稜。其次茄菜と訓じる。その下圖經

改めて水香稜と一名よあげる。水香稜はも荊三稜を

食て。あま味がたりとせざらひべまつや。ナリヨ茄菜ニ稜

一石より定め。本草和名のニナリ。三稜茄菜とあづてあわぞ  
是非ともよ一名と考へぬ。このかよ海蓬菜。からとらぬせ

たひりよ水栗みと一名阿。

ひらしろ 本草蛇床子也。俗よりひぶどうと云ふ物也。

ナリヨ 蔡子名の字もじひぶどうと訓じる

苔

苔井音井青西のあいま。

ナリヨ

ナリヨ 生ぬりて。ナリヨキのや。蘿の類や。渾氏宿

本の苔よ。ナリヨふが引くと。ナリヨ木門ものねや。

ナリヨ。ナリヨあくとくとちむるハ。苔井とちぬとくとくむや。

同前。もと井の崇雅卿きのとく。又の説苔膽

アんだけ。一名と云ひ是へやう説なり

さげみわやのむんにてあるも。たゞものよりハおぐ。

和名アサヒは生草アサヒと引て酸漬の字と云アサヒ。すらあせらる。い西

本草アサヒを酸模ミモホの字すらあせらる。酸母草アサヒ。ニシキ酸アサヒ。

セヨリ山大黄アサヒ也。俗アサヒは不すいものと名付。居アサヒのや。

根波モアシタウニ

かくぬまアサヒも。よーのひこのおみじとあかのゆのゆーすとおきや

岸の額アサヒは生はが。あやうとまのひや。必あやぬまの夷アサヒをあ

つめらよ。むらば。觀身岸額。雜根草アサヒと幸事アサヒ乃題アサヒて

羅維アサヒ。作生高草アサヒ也。

生壁草

生

壁アサヒ

いつぬて。まを。押アサヒあひと。けはくわいしや。まーのひくらわよ。これを

壁アサヒ

白灰アサヒのゆ

そわくよ。あらわめ。まを。おゆのうき。いやあ。じとおゆ。

そも。あく。まく。あ。まく。どう。あく。やといづきとおく。

垣衣アサヒ

家アサヒ

井端アサヒ

三のまは。あい。や。石のつ。ひ。む。ま。の。そ。あ。あ。と。わ。ま。ら

ト。あ。ひ。ゆ。く。ら。と。西。ゆ。と。お。く。

大和地語アサヒの字。まわす。ま回アサヒ。あー。わー。も。あー。

わすれや。との。お。は。う。き。か。よ。て。ほ。の。や。う。う。り。わ。る。や。

意アサヒ。と。い。く。て。お。は。な。れ。の。お。ま。た。き。あ。ま。く。い。ゆ。は。ま。せ。

又首アサヒ。身アサヒ。まに。もの。思。と。く。と。て。み。す。る。も。く。わ。よ。け。く。も。是。

を。ま。の。お。ま。内。へ。名。あ。く。り。ま。と。つ。ま。と。て。用。ゆ。ま。の。を。

ま。ま。ま。あ。り。と。く。か。我。名。お。ま。か。ま。ま。か。い。や。あ。く。く。は。

は。機アサヒ

考案していわゆるあやのひ能よハあるのうのまをあひき

れと考かねど。うのまのひのひもうのひもつて一言や。

うのまの名前。とのまとふづきあらまくあはせとふ。

心や。うのまへうに

華

淡芽

人

蓬  
ちもぎはくつぐふもゆ  
荊三棱  
まくづげ  
萍又蘋  
澄第  
わくぢ  
青雞草  
あくばくら  
とくらくふを

風よゆくさんをくそりかんと。おもひやすくておこなす。

笠

摘味

鷗

木賊

麻也

人

のよみすめのよみて。おもひあはとらのよみて。じうごり  
深

うふいとうあく。みほまのよみて。おもひくのよみて。つけあく。  
珠

つぬき。念佛して生蓮花のゆゑとす。

玄義云妙者妙名不思議法者十界十如推實之法也  
釋云十界諸法本來本妙法甚深微妙之法也

蓮をモ詠トシホのひのくとや

生淤泥中不染淤泥妙法在萬情中不染萬泥全如蓮花

是其譬喩也

也ハ佛小す

方便品云乃至以一花供養於巨像漸見無數仏

まのひのうす。説くまこと  
まことあまひおもひあるゆのゆよくのゆよくゆよくゆよく

スイヨリヨリ  
羅翁翁おととを汚よつてくらむと

スイカイ  
羅蓋淫風迫も貪着壁ハタケみ蓋權カクの病クモロも。古往

あひども。豈クめと不相合マダと。蓋カと。ちゞぐらむや。

山管  
やぬすけ やぬぬ

やまづけ童蒙チトメがス麥門ベニモウ冬ヒナタときや。ざくびいげと不善や

蘿ロ日陰

濱木錦ハマキシ

毛ウけ そゆゆ

ひりけの向ま回。右あよきをま。松石マツシと唐影カシタと引く。

蘿誰ロミの字ひりけと訓クニじ。也。菩薩ボサのものや。又そゆゆハ

みくまのうらはゆゆ。白くまの。うらへゆくとあ。

このみゆくの経キテ。りりよふたれむとある。大僧オジンの大饗食オシムの時。

志广シロがふよ献エミする。キウ。也。是ホシと。モテ雉ホシの足アシとつし。也。松の

くずの風フウよ。かくカク。まくマク。のひよきく。みゆうお

・草のむハ

唐  
毛ウけ そゆゆ。和ハ。也。やまとめぐらわ

杜甫スフが詠ウニ。麝香眠マツカシ。竹牀スゲ。歌金桃カシタツと。仰アガむ。也。とせ。

毛ウけよ。もくろ。もくろ。あづ。あづ。おも。おも。おも。おも。

瞿麥クダラ。本多ヒトド日ヒを。まを。引ハシて。一イ名メイ不ハ竹チクと。あ。

女郎花 女倍芝  
指捷

拮捷

荔茲

アラム枝りをひつゝぐれど。あくまでもかくまく西へ。  
アラムの  
とくめやあはれあひよそ。ひづくはくわ

本草十三龍膽苦口龍葵味苦口膽因爲名是多治膽也  
又有山龍膽味苦其葉經霜雪不凋

少於之

卷之三

卷之三

臺草  
このアマガヤの花もよく咲きます。  
はくすみしすみのあうやのあぐ  
草木の花もよく咲くとあります。さて少しあつておきや  
うへとつけのむ

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之二

卷之三

{ 8 100}

卷之二

卷之三

卷之三

卷之三

卷之八

ひも わ

文選

१०

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

まほどの原由。かくの名をも。がる。

萬葉  
常帛

卷之二

卷之三

後漢の古射山<sup>元</sup><sub>ミ</sub>を有す者有<sup>アリ</sup>也。徳<sup>カハ</sup>にて帝<sup>シテ</sup>也。のを

為豐贊  
舊

卷

面

あすのため。あすの心も  
あすの心。あすの心。  
大新谷

十才德

書物  
あきのとてだ。いとくわあくよまきみれしにづから  
うらわくらわのう。うのすゑのすゑで。からいとくよ。おひし  
とくよ

源氏おづかやよおひもしめふとてとわ、益津かよあく

とくに

蒙古文

後撰

約二石ねでうらひ頃かくもくらありますので私をも

唐葵日向葵とある。  
うあひた。そわづしてみのよ。日のうすふとぞひそ。うふうだ

あべのま木のころともおがでおへ

說文 黄葵常傾葉向日不令照其根

韓忠獻詩 少天花尽歇錦綉獨成林不當時眼其口助字脣名詞をあらわすものか

かのふをこりぬど。らく脣くちのまぐらすまう。宏は、ドもあくあむ事か

タれど。おうすとぞみゆきらゆく。よもよもす

このすはかよ考。ほ拾茎和象御都くわくす

萬葉

かのふをみせよ。みをあだ多々御都くわくす

映

本草 薔薇夏草早花用者也

自民文集十七 雜頭竹葉經春熟階ト薔薇アニキ夏用

●集七

古万葉集

古今 後撰

拾芥抄アシノ万葉集廿卷四千二百十五首 長さ二百五十三け由也

部立續乱不定

古今真室序 平城て宣詔侍臣令撰方

象集 真考このあひ帝說多。言是之律師リツシ平城之号ハ者也。聖武並桓武大同之朝号アラス平城帝見園史

撰者 懷上憶良或稱橋大臣或稱若原直脩或稱大伴家持

参考時代、聖武天皇御代者、橘諸兄左大臣大伴家持と定  
す。

詔曰、古方家集を四卷。承けり。ノヘの事。傳  
天皇代。源氏。じめ。其の事。清源帝の古方家集  
と。考。也。も。も。古方家。一部。其事。志城。宣治。行。之。撰。又  
古方家。五卷。考。之。撰。一。役。御。つ。の。五人。行。古方家。考。古  
方家。之。の。介。膳。院。の。て。名。代。撰。四。卷。目。總。事。之。細。う。傳。行。之。  
撰定。の。所。よ。ハ。あ。く。て。也。本。代。之。所。く。之。也。傳。行。之。

古今真字序云、詔大内紀紀、及則湯下詔、治書之亦因襲、  
因也。河内躬恒右馬府生主生忠、參多獻家集并有案、  
事方同族万紫集於是重有祐鄰鄰而奉之。初為二十  
卷名古今和事集。其後集于也於のう時やあとす。忘  
也。高人をじつてまのうすくしめけひて。而秀後のりん  
ぐる所とぞ多きあり。於夢古と集女是を百三  
枝機。中納言入道柳公於昭陽令後機之時後ト宣古之  
漢濱公。慈人少ね奉り。天暦五年辛亥十月和利聖、  
人少ね伊尹為和方所別焉。和方所根本是也。坂上望城源行紀

時又大中<sup>清原</sup>能宣清原元嘯<sup>木</sup>推之<sup>之</sup>委覽無所見

拾芥云後撰集其卷子二百餘卷未成三百五十四卷

菴も物語りしるすは、漢武帝の西代天平勝宝五年十一月  
左大臣諸兄<sup>吉エ</sup>、諸つ大文集て方多集と名あせこまひ  
國面の先帝の時を古今文集えあるのへきせりひせり  
めてもうせらせりふ。この内財<sup>アシナ</sup>を。その古今よりぬきを  
しのものもあのも揃せりひて。づるよ揃じともほ揃集を  
ひふとつりさせりて。また文選せんじゆひくらぞ。

十二月の事はおまかせいためある

山門をかまひ三年十日めの御成りと、禁足する。ゆゑに、父をも  
絶ててあひゆるが、とくがゆ。父は、山門を守るべしのうへ、とわざ

卷之三

かくのすよやかなるてつらひあへまほだあらむと。おもむきに  
まよひをすくふあけぬるあ。いゆちよてあめのうみこゑしゆ。  
大弓はさき  
角んぢるがむかのまへせ。くわらやわらよそくくらは。  
許  
（このひの從者のみ）  
（おんじゆたる）

かひぬらひうらひうらひうらひうらひうら  
かひぬらひうらひうらひうらひうらひうら  
かひぬらひうらひうらひうらひうらひうら  
かひぬらひうらひうらひうらひうらひうら

人のうるいぬのく

・あぐへなむの まことおまことおまこと

かひぬる。よもとひと。あす日と月と。や

あぐふ。のわくはまく。くわくくわく。

おとみと。あふとさくばや。あくとさくと。あふと

人かうをあくわくうせめりをゆふあくぬく

とくとくおねふす。うすのねて若冲づくよし

あらゆうい本づくねよじれよ。うとふす。あきよゆく。

もののみハくがくとあくとく

かうとくおくとくみだくとくおれいとほくとあげゆく。

ヤ障子

ぬねすなむやとよりつぶとあけがくわく。すくと見

かくわく。いぬすくよくきよあく。うまくつゝくとすく

あくみくまくよ。うすのあくあくとゆくとけやうあく

こちとく。きのうとくとくとくとくとくとくとく

かくわく。うのうとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

姫とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

懸想とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

詠歌

あらうくるてくわく。うくわくとくとくとくとくとくとく

是考のあくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

詠歌

あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あひきとよひてよゆびもあひこと。伊ふかほおのくわうひあひ。  
何  
をのこすもくらひべようかめりと。じつりくわう。あうやうかうりあひて  
みくふとおひく。よあひもあひわびー

雲異記云王質石室山見數童子因暮與質一物如棗核人含之不飢蜀隸終斧柯欄尽已歸無復時人

立蘇  
“遠植”  
水のわざくらむてひよそす。人一きよる  
とてよしむ。すばらひのわざで。あらめへり。かく聞こえむ。いふ。  
かくへんじて。あはれと。さすがにあはれ。あはれ人ひと  
あはれ。因ゆゑ。アホス。あはれ。中なか。アホス。みどり。あはれ。アホス。

・わらべの歌  
おとぎ

تَعْلِمُونَ مَا لَمْ تَرَوْنَ وَلَا تَرَى مَا فِي  
أَعْنَانِكُمْ إِنَّا أَنذَرْنَاكُمْ مِّنْ كُلِّ  
شَيْءٍ فَإِذَا هُنَّ عَنْهُمْ يَخْفِي

ウタシハシトヨタマニジヨリハシ

頼氏家訓ニクテ借人典籍皆須愛護先有缺壞就爲

補治是亦士大夫百行之一也

清陽江深讀書未竟金有急速必待冥束整者而  
後得起故無損敗人不厭求假或有狼藉儿案分散部  
秩多爲童幼婢妾所黠汚風雨患氣所毀傷爲累德  
吾每讀聖人書未嘗不謗歎對之其故猶有五種詞

義及聖賢姓名不敢他用也

おのとせをほしむらまわすて。くまゆ人のすとく  
中よどる。つひよとづんば。くわらうせどるよ。あるあて  
あみでそとせ

省練を。おとす。おだらかのとて。中重かきせの紫  
束や。搔練ともちや。紺もとをりよど

内宿

席

上小部

しづけねにとのをひく。おへぐみのこどもあけむだ。場  
所トうすき入て。あつもひすし。ふ遊を害あくもきどの風  
きじてへかとひく。せんくわくじきのうがくはるもあ  
るば。べてみせらかふじあてもか。まくびくさくくもあ  
る。玉のいみじうをねわらひる。をりておとと。園あ  
ひ前もおもはせり。ある人々のうわををめう  
あざよ。やくくゆとひ。左湯門内陣よ。またんとめげど。わき

くとまじつみて終る。船上人あまことかへて。おおへ一葉の秋  
すずて。ああああああああ。まだ入てゆきよ。

卷上

朗詠夏日閑避暑源英明  
池涼多景三伏夏初風

おとこ達の事は勿論、お土産の物も多様で、居間には上人の女房のもの、日下のもの、吉野のもの、奈良のものなど、何處かある。おとこ達が、お出でになると、必ずお土産を買ひ、お土産を貰ふ。おとこ達が、お出でになると、必ずお土産を買ひ、お土産を貰ふ。

あ。うぐもうめやうでまのうだ。おわづけよつとくすまへ、まく  
すまへ。わざとおひきでまくはまほんの。おひきでまく  
まくはまほんの。おひきでまくはまほんの。おひきでまく  
まくはまほんの。おひきでまくはまほんの。おひきでまく

アカハラの志士の事跡をすりてあひあひと語る  
人の代を

人有りよとておもひてあらう内にゆきあら。はなをうるをゆ  
幸國(下)ゆき  
とゆかのとすく人のつとぐまんとばひて。ええといふほど  
次オク人のゆきうるを  
等因(草生)きち  
あくまうのむらうゆがわよなきてやうであよ。あゆいこりかは  
らううて。みゆのとくせとしゆくアリしふか一  
幸國の三字せんくわく

・ そらよあかねの  
祝言

祝言

抑月上の御日。東宮御御内。左の無源府。御物。タヌケ肉タヌケモ。奉ひ。其根源。仁喜ニ。月。諸事。秋。ト。献ト。高

精魅を追ぬ。すげ氣と走りて。立ち上り。いそかの中より生

まひきらあひの宿泊で。おねりあり。ひよどり生まへるあば

色。角よし。もるあはげし

神事人長のゆぢやう

人長を神事の番人陪從ハシロの長也。内侍の法神事ハシロ。韓神  
其駒ハタツの時起て。おめや。根元の根源ハシロ。あー

禁秘抄ハシロ。自一陰院深附。十二月有法神事。多々陽年ハシロ。迎代  
毎年ハシロ

江次序ハシロ。次序。湯沸あ飯本膳。女官引綱。宮修。次主上近因坐。  
次將小少。叙接。内侍退下。殿上人。名。准。和。高。名。准。和。初盈三狀。  
頭以下相分。勅之。番人。雜多取。鵠子。源人。長起處事。先當。高。  
次名。番面。次人。よ。起。人。長起。石。男。源人。一。進奉。仕。罕。  
人。也。退。次左井。ハ利。次鈎。食。地下。信。後。次。甚。鈎。人。長起。若。是。  
間人。長。給。鵠。持。

すく。ゆぢやう。まき。

ゆぢやう。すかし。まき。かわひ。よ。貯。ア。や。う。み。の。ち。む。き

祇園は古靈舎六月十四日也。忌事根源云。この日は祇園ハ  
古の御祭日也。も長き。まき。かわひ。つる。ま。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ハ。か。

祇園の供。貞觀十二年。了。證宣。乃。多。行。て。山。珠。の。ゆ。う。す。  
す。す。や。幸。藍。鳥。弓。の。ゆ。う。べ。よ。て。牛。絃。天。皇。と。も。幸。證。天。神。と。

ト。署。多。融。院。天。福。九。年。古。靈。舍。初。房。也。

清少納言

振幅

近頃余の家乃所。とどきもて拂つり。あの方の人を制して居候。  
おもむことよそぞい。あを擣とお事よりりげ。あこの事。  
あらかとをあのうち五十過ぎる事ある爲めや。お老の町。  
人をおぢきゆうべ

清少納言旁註卷之四

小鳥

あまてぬの とおはすせ 異能のうち

わふくはねとて俗ふよこゆうのうや 笠締のこまばりあらう  
や通じてどひなうぐはよくあゆるばんのとくのあや

除目ノ一 宗一の園をあ

陰目アカモチノ一 宗一の愛好の園より上中トありその中より老

長の人を上園の愛好とすかを異能也

法名のあひあぢご縁の近屋園アカモチにて。まほらんせしを経ふ。

ひみじう極アカモチしきるゆうじうか。

江次第ニ仁壽三年十一月十三日改定  
十九日正月一日

三ヶ夜也云

父の根源小仁秀殿の酒をうち御うけて。帳のうりに急  
て。廟の御乃聞ふ。又あやれとあく。仏像をまよ。以前か否。  
和がさうす。もは。一地獄法の屏風とあつ。初夜は夜  
中夜。多忙導師うた。行あづみ。人をばつし。うげりの  
うめ。ト畧

仏名經云。若有善男子善女人。同是三世三劫諸仏世尊名号。一  
歡喜信樂。

宋をもの語云。十二月廿九日みけらぬれど。湯名名とて。ざく  
の後古沙羅身。ゆきだらう。ふく。目とおもてありれや  
是ハ地獄のあくまめびき高屏風とて。三世の仏名とまくもて。  
海度すべし。

もとことよ。一也。わねせう。あねど。らふ。ア。う。そ。草。し。ま。ふ。う。づ。火。  
雨。う。づ。う。う。て。ざれ。ぐ。な。り。と。海上人。よ。ひ。つ。ぎ。り。よ。め。て。山。あ。く。び。り。  
道方少納言。源。延喜。と。め。で。や。海政の。ゑ。ひ。ほ。の。琴。じ。席。の。笛。煙房中  
持。ひ。ほ。の。か。え。う。ど。づ。や。す。う。一。

職原神任。源道方。正暦六年正月十一日。補少納言。徒五位上。

同神任。源。海政。長保二年四月廿日。阿波守。權守。徒五位下。

道方。宇多天皇の東。正二位。左左官。重信の子。女。師。補。内侍。

海政を。道方の弟。女。參議。安親の女。

六鄉補住。去上。東木丘回住下。源經房左。左者。左言明。又。男。女。右

右臣師浦公五女。

公鄉補任。藤原乃成祖。太政大臣伊尹之孫。但爲子右少  
義孝。一男。母中納。玄源保光。鄉女。

箇免  
説を吟一筆也  
むかわぬもじで。運意引出する所がどり。大功玄蕃の墨室の所ハ  
やうて。めぐらすまのまこととくの紙。すしのじゆひよ  
誦

白氏文集忽因水上得  
猿聲，色俱變，欲語遲

うやうやしくて、音楽の音色すてこの詠は感すよ。  
うやうやしくて、音楽の音色すてこの詠は感すよ。  
うやうやしくて、音楽の音色すてこの詠は感すよ。  
うやうやしくて、音楽の音色すてこの詠は感すよ。

おもやじゆぢくわく。ゆのすくはゆあひゆ。  
ひのまくはくのゆうきく。すくとくとく  
はく歩くじやうか。経中ゆのそくをゆまくゆまく

四日仕參木

清少納言の経中  
いまだうつむかへ。あくまどおもひえをど底上るてとみだうえの経中  
清少の  
と。さくまほげてねどあらぬぞうそあらぬ。をのづく間あゆ  
経中の  
経中んやどわふくらむとくとくわづくも

清少翁  
あひやのふやまことさんのみ。人へもひどくかくらひで  
あふ。一りふとくわうてとあひだよるむだくよつせむひゆ。

清少翁房中主。清少の房中官は寝中主かわせ。

禁秘抄ナツシヨウ夜御殿四方有妻戸南大妻戸一間也帳同清涼殿  
東枕臺御座敷也御枕有二階奉安置御叙神龜皆有覆  
蘿芳也詩叙東南帳西角有燈又帳東北敷裏爲女房座  
めうる者居ざれをでむあげーのりよ内らくさわらせてば。ばづひてゑんそぞほぞ

道院庵の説。文字が書旁はほろとわき。はづりゆく。

翁と二つてあるふ字だらひあつる。

清少翁房中主。清少の房中主かわせ。

あふうけ。どうもおなじみと見えても、すこゆどうこりて。あふ

翁の

あくやく。まゆとくちあとくばらやうふふ。あやしくととのふ。あゆ  
れあくやくとくすふ。どのくちあくやく。あくやく人ほてあくやく集。

翁の

あんとう。けじとよ。これ詮中持瓶のまきをひふ。清少のとくやく。

翁の

あじとみをひふ。つるかね文あんとおひどい。あいのくとくとあき  
くわねど。ねはぬきとくとく。さくらゆ引ひかくわくひぬ。物人のもの  
のをひくまくふ。すからりあらうて。ばくとそのあひげとえゆとくとく。  
春を

翁の

あくやく。まゆとくちあとくばらやうふふ。あやしくととのふ。あゆ  
れあくやく。あんあくやく。まゆとくちあとくばらやうふふ。あやしくととのふ。  
あくやく。まゆとくちあとくばらやうふふ。あやしくととのふ。

あくやく。まゆとくちあとくばらやうふふ。あやしくととのふ。あゆ  
れあくやく。あんあくやく。まゆとくちあとくばらやうふふ。あやしくととのふ。

清少の

くわうど。ひづて

王氏

白氏文集十七  
蘆山草堂丙寅虫百寄牛二  
大庚三十二貧人

蘭省花時錦帳下，  
山雨夜草菴中。

葉省本謂太政大臣近代弁官謂蘭省、ちのむハ只禁中の事也。  
その不自由なる事は御の恨焉あらふ付きさりよとおせ。あそばれ。

中宮の私廢帝しのれを承  
朝廷よりはふるひて往す高麗のへり  
ニ高麗本

おまづさきや  
あまのゆき  
使のゆき

あらわのむすびはるまかひでのわらーて。まのづからぬれ  
翠の日あらまくれおまきの葉  
キズ人といひゆうて。うをつまど。かわとひり。もかねてほくめ

清少の  
昔あはねまきやう源の経房。清少の吳孟子うどばくと  
おもてへとえがそわらば。  
清少の記  
あらわくしやうとべ。あらわさん人をかさめへあん。とあのうてかと

めくあすしとて聞かず。かうや。おもむりあづれよ。  
中まの景  
うふぞうさんとつちものをそよぐ。うつりゆう。経中将のとらわす  
は英ことくべども  
あら香毛

あすかへくしまかまわに位をぞ集ひてよろばの内へびくら  
れむの御清少納言と高名  
とくづづりつづく。かやくうめのじげよあもももづらうと。ま

清少納言の筆で、その筆の特徴をよく表す文。清少納言は、平安時代の文人で、『枕草子』『源氏物語』など多くの文学作品を残す。この文は、その筆の特徴をよく表すもので、清少納言の筆の特徴をよく表す文。

清少の使を  
清少の  
じつとて、まかひひあらせらしゆ候。あらひのうへ三脚すゞとく入る  
このもよもよとぞ。  
清少の布ふとまきまくあねをあしらひ尾

ゆくと。さのむらづきはうむり。まことひゆて。あ、神をもて  
弓矢りつをひぢ。 そよぐ  
こみの文を 使ふるを。  
くわくをまか。 うへてこすひえどくわく。 わくわく

さうやあゐのまゝやつてゐる所とへりてある。ふくらひ  
あこが。わかつてゐる所へして、ぐらうや。うちかゆ。あわせく  
どうんと。をありもあやしくあらゆること。多くて、三月。みだらぬ。  
人づか。往くとす。うじきとて、うじきとて、うじきとて、やん。源  
中ねつまよが、おおきなまへで、づくわづくうへやまへ。のう  
うのうじきとて、あがまきうきのん。さめとつめうきのん。  
情少のうす  
きとて、つむきとて、なめとて、あはるのつむきとて、あんはんはん。  
上局じょうきょく  
上局じょうきょくおほきとて、清少きよすとて、  
清少きよすのひきとて、  
のまきのとて、  
おほきとて、清少きよすとて、  
かんだ  
かんだ

なりとて、

司辰八月十一日肉まで。公卿衆上人宣紙すしらふ

教隆說官召者秋除目也。号景官春除目者号縣呂各拜僕  
輩。呂憂春者太政官廳秋者於外記廳而仰之乃稱官呂六月也

先乞の室。室の根帰ねきすあー

いてゆきふうりまきのよへり。城。うわもくく。おもひあへて。あん。  
ゑくら。清少きよすのあ面白面白あく  
ゑくら。めづらくあくのうからまく。ばくめあくたるうのども。中将のこゑ。  
けむ。おがくのどづらく。あごのき事こともくづらて。三月。もあり。  
とくふわは。とくすのこゑ。あくよまく。し。ハ。かく。かく。  
えきとて、まきわしこへりのん。じのて、かく。西。ふわうもし。ハ。かく。

大々とよやまわざと  
則あ  
さあむちあふべしとおもひへよ。かのめぐらすうば

則光清坐と申すを承。人くともかよ。兄妹と申す所ある体。今も

少々や、まの兄弟があつて

まの人のやめんじ。せうとくもくとくいどひこちひりくとも  
居たる事又それがむるを知るよ  
おおのとく

言加の字この句と付すとあらずと  
猶豫もよし。まことにそぞろ歩く人あり

則光沙を不當あれや

まほのうは上ののを  
ひもひきあわせ  
くわくつけこむよへんやめ。  
まほのう

人く  
わらふるはくをもとめし  
中へねり

一説やの口に之の程かくの事あらわ  
す。が爲めあるべし。そしもくわ

おまゆをあんとうば。

職原少將相當正五位下五位殿上人中為譜第

叙位時去職三位少將者執柄息常被僕亦藏人頭時居物

是古例也。亦辨官員之公達之中有才名者事也。

あふゆきして。まほやわらじとて。わくをあひなほりとこよ  
情少のまけしよや。 情少 則光 実家

清少と則光と  
酒徒とちいそ  
尼也

中まの清がよきれ也 清少  
ナ

后家の道や一乗院のこの名義の多様な事  
なる。この如きをもつて、より多くあらう。おのづこ

清少翁

三ああごふうきてまよあき。わくせうあはうそ。あくゆううみ  
あかまくとあくはくは其事をと  
いもせ々のアレやわざくし。ひでのうよぞ袖まちやすきどりのり  
中どりすりのり

ておもひあ縫ひめりし

喜そらふゆき

賦曹子亦卷より

この間の二月ニナリ。まのとくとみづばうーとゆきをもみり。  
ぬもよあひくで。じめつわよのくわみくらし。あこの日

梅が五金のつな。御花金と云ひ名也。梅とうめのへ  
のをと。夢秘抄云。梅垂梅西白梅東紅梅之由在清少納言記  
とあゆむのあくよみくらし。定年の御梅ます更

消息

えあゆ

経中ねのせうとこと。まのとみくらし。とくとおしよ

消息

えあゆ

ぬねべー。うかずひまゆる。ひあくあくせ。まことのくらし  
う。ほわねるるをあらぐ。あくわよと。だげのめくらし。とくとお

清少

中園皇隆御運殿禁秘抄。是非サ御更衣之儀。唯御一串沙汰也。上吉不  
四安一条院。虎殿也。牢。絶有之内藏寮外御服裁縫所也。後冷泉侍時賴宗公女侯。其後  
妹也。

清少

絶無其人。最大内裏の園。御考候。も貞觀殿后町の北九間署

清少

も所。うねあみて。おわくねく。よろづとく。人のくせとあ。わらうし。  
なまの清少。をとねて。やわらうし。うもんと同。もとせじ。とくとお

物を。ゆりしき。うよくすとく。うもんと同。もとせじ。とくとお

内のみアフヌ。清少

おもむき。とくとお。うもんと同。もとせじ。とくとお

経中の佳

あゆばくとて。経の夜。まき。おせりある。とくとお。うづの園。とく



西の京是平安城のあら京也。萬の大宮廻り西と云。お主

通すあへ町北角を二重より一重まで是大内裏のあら也。

清少納言の内のみ。跡也。

清少の庵を

経年

はやねとあらうけや。ひつゝにてねまされてあまめぢらし。筆一束

在客

のあら心

のほへのけ

経年

のほへのけ。やうわらわらひび。むげよつとおもひうじとくわがだ

温

のほへのけ。清少庵はるす居す。清少

のほへのけ。ふきまつらひかく。しづきそぞうかさんとく。ぬくとくもあらま

詠申

のほへのけ。おもひうのまこと

あておもひうのまこと。りづわらもん人を。おーう肉よ。づから人のあらんと云

詠申

のほへのけ。外は聲やううまうあらま

のほへのけ。おもひうのまこと。おもひうのまこと。あらま

詠申

のほへのけ。おもひうのまこと。おもひうのまこと。あらま



この事は

清め

大正の文書

經房

法政

この事前奏勇健者清少志辛と  
乃まかげりそくわくアハタ馬のさうのわづぎと。のぐち

則光

あやすかはらふまのす宰相申ねどあよりて。いりうのありて。  
さむるも一のやすら。づかうとひりけよ。ちくよーのす

清少志

トメ。サカシ。強き。おもをかくとあるをあらがむ。食  
トメ。あくまく。あくまく。あくまく。あくまく。あくまく。

和希

カゲ。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。  
アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。

中間

アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。  
アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。

不角

アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。  
アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。

清少志

越 清少志

清少志

アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。  
アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。

口家

アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。  
アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。

唐紙のてて見

アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。  
アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。

江次昇え季御讀經春秋二季請百僧於南殿讀大般若經

其内定前僧サロ於御殿讀仁王經納言參議各一人著南

殿行事自余皆候御殿貞觀時每季行之元慶天皇歲

祚之後二季修之

後院の荒れりまし

清少志

宰相申ねのたまつて。一もひけ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。  
アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。アヤシ。

さんばく

五  
十一

は成るに眞の作で才と力も充潤してゐるが、

清少

和布

ばらうふはりてやひたひてのらるとして。一葉せめてとりゆく。すどう  
則光清少納言。中嶋則光のひき出清少納言。則光のひき出。清少納言。則光清少納言。

経文  
せうてとりもくさうり  
罪文あがめ

あらやう。ゐてありまへば、わやうとひきこむ  
まへば、わやうとひきこむ

الله يحيى

う。どうぞうへんやとうへん。あやのあくめや人のひとよみ  
のえがくをあきやうへん。うへん(おひなとおひなとおひなと)

のや人のとよみ

まのものではありません。おもてはねは、  
うなづきをうなづき、目で見やへ度に  
うなづくうなづくうなづくうなづく。  
うなづくうなづくうなづくうなづく。

一  
卷之三

中止。すよ雨せとまひつ高らかと仰ぐ。その事でまたお  
あゆ。後宿連東入道さよ。じつは則ち若人を仕りる所

則克盡人子之職分耳

未だあがみの  
見るこひつとの處

のやもと

うそすら中間くさ  
うれもとやべ  
うちまち園へゆけ。われ  
のむき

おのれをめぐらん人を。おもひよがく。おもひよがくしてあ  
る。おもひよがくしてあ

想  
高  
有  
事

うふふとおんがくをきのほをかまひあつて中身をかへし始へり人には  
のうおの丈たなみよ

卷之三

財光と清少と見るものあくべども、かねてかねてのあくべども、  
いはせの山のゆきも、いはせの山のゆきも、

説小治  
のふみし

卷之十三

嘆  
則光  
の如き  
御爵  
と云ふ  
事は  
受取の名  
あつて  
ゆきり  
と云ふ  
事也

風土記云近江縣眉淡海自帝都迎有大江故名迎江  
遠江縣遠江湖是國有大江自帝都至遠江名遠江

藏貯令上固守人分人擇人目人其藏同大固守位令

。まことにあらうとせうかあらう  
。まことにあらうとせうかあらう

ほのとてあらかくみて男の子が、  
まことにさへた邊の障  
あらきのうら。里ふ出ておげあるふるをあれど、おひそひおげり。  
清少  
唐官うちのえはに

うらやまてわが一あんぐりをくじめてくろんとううおもひのちーくわど  
（清少の）  
長の室（ひやう）おもひを忘（おもひを忘）  
内裡（うち）のあがけのゆ  
がくせんのゆをゆか（ゆ）こゆかのうやくへりてよはゆてうめくと

中絶するが目に見えるもの曾てことや。ああ痛でござりや。あがおもてよきのうとつてうへーあそ。おまへのうらぶようづ

廣  
あくすくうしれ。ひづくのまくわくもとゆんとかん。おわせ。おは

おはようございます。ゆーじ。ゆーじ。あははははは。  
おはようございます。ゆーじ。ゆーじ。あははははは。  
おはようございます。ゆーじ。ゆーじ。あははははは。

李の空き地を  
あまみめらうしよおはす。うめのひめよ。ゆえのほほんをめゆり。  
佛縁がく  
ゆどいあくよけをねほへどものかくあくらむをゆか。ニテばむわうて。  
あんのりくふあやーきめーふみて。様子のほほんのゆうしゆゆうくじく。  
まご佛もくえみよこ  
きく  
ゆでゆく。きくふとくふゆを。うふのくわゆりあんと。一ひじゆくとくじゆく。おい  
きくふとくさとおびのも五すげんかくらわも。やひくへん。おが  
やくふすけくわとくと。の空食乃財を  
煤

前漢項籍傳  
說者曰人言楚人沐猴而冠果然梁  
王子雲曰沐猴而冠者智小而強謀也

前漢項竹稽傳

說者曰

人言

楚人述

卷之三

冠果狀

梁武

帝歌日

ビク ピクニ ナバ ノバ バイ

佛四部弟子を以丘尼優婆塞優婆夷  
アマガシ  
アマハセ  
アマヘイ

御所の御事と云ふやうな事は、御身の御事と云ふ事である。清の調

卷之三

あすのまことに。おまかせいたし。

わがまな  
うきよの  
よしとよし

卷之三

すまへり。とくにすまへり。すまへり。すまへり。



セ房セイボウどもさうて、もあひて入ハシり、おわくとも、おゆく、庄ヤマニの山ヤマをよこせ、仰アゲふて、まくらゆて、仰アゲふてと、だらうもて、つる。

北面の侍  
后宮  
雪山ヤマニ

雪山ヤマニの回カク、涉カタマリ記メモリ云ハシマリ、承和二年、國三月廿日、令右後志能鳥部サキノミコトノカバノ、  
椎ツバキ雪スノ作スル、蓬莱山ボウライサン、御房ミヤヒロ、小庭コノマニ。今切カツ、賜タマフ、事モノ則ハシマリ及シテ、蓬萊雜色ボウライザツソク、侵者スルガタ三人。

小石記コケノシ、花山院は深處タマニの南ミナミに蓬萊ボウライ山サンはけハケ、セ作スル文モノ也。寛和元年

正月十日ムカシの夕ハシマリ也。

禁秘抄キンヒショウ、年内ハタハタ、雪夢ヤクモ、催ハシマリ所衆シラフ、漳口タマグロ、參春ハシマリ雪ヤク、沓タマ鼻アシ、隱ヒカル必ハシマリ可ハシマリ參大内タマニ、藤

臺弘徹殿タマハタハタニ、里内タマハタハタ、依便ハシマリ、威人ハシマリ下ハシマリ、知修理ハシマリ、職儲屋ハシマリ、具ハシマリ、雪ヤク不定時ハシマリ、被召

諸ハシマリ、勅願寺タマハタハタ、執行奉ハシマリ之ハシマリ、漳口タマグロ、相具ハシマリ、未ハシマリ可ハシマリ、及シテ、取殿舍タマハタハタ、上ハシマリ、施雪ハシマリ、衆ハシマリ、作營

山口タマグロ於棟板上タマハタハタ、蓬萊山ボウライサン、衆作ハシマリ、山口タマグロ上ハシマリ鷄タマ三人タマ、立ハシマリ奉

行持ハシマリ、柄振ハシマリ、意人ハシマリ、頭ハシマリ、簪子ハシマリ、奉行多ハシマリ、直衣ハシマリ、旅人ハシマリ、候ハシマリ、便宜ハシマリ、傳事ハシマリ、修理

職作屋ハシマリ、如是ハシマリ、事上吉ハシマリ、不見自中古ハシマリ之事ハシマリ、也事ハシマリ、始ハシマリ大畠タマハタハタ、一條院タマニ、御時ハシマリ以

後ハシマリ、清少納言ハシマリ、記ハシマリ、在其子細初ハシマリ、雪見ハシマリ、參近代ハシマリ、絶ハシマリ、初雪ハシマリ、日ハシマリ、仰アゲ威ハシマリ

人ハシマリ、令見ハシマリ、參益ハシマリ、人ハシマリ、束帶ハシマリ、或ハシマリ、宿直ハシマリ、召朝餉ハシマリ、仰アゲ、之ハシマリ、内ハシマリ、侍傳ハシマリ、益ハシマリ、人ハシマリ、進ハシマリ

參給ハシマリ、祿内藏ハシマリ、寮ハシマリ、絹ハシマリ、大苑タマハタハタ、省ハシマリ、布ハシマリ也。

セ房セイボウ、若人ハシマリ以上ハシマリ、絹延タマハタハタ、主殿掃部タマハタハタ女官ハシマリ、信乃タマハタハタ、布端下タマハタハタ、各二段タマハタハタ、御厨タマハタハタ、子ハシマリ、

得ハシマリ、遙各二足ハシマリ、刀自各三段ハシマリ、是外ハシマリ、御廁タマハタハタ、人長ハシマリ、内ハシマリ、暨ハシマリ、主殿タマハタハタ、官人ハシマリ、史生ハシマリ、

安生ハシマリ、占部タマハタハタ、今良ハシマリ、諸ハシマリ、陣ハシマリ、府生ハシマリ、番長ハシマリ、食人ハシマリ、依差ハシマリ、給ハシマリ之ハシマリ。

このよりづきハシマリ、人ハシマリ、之ハシマリ、此ハシマリ、きよめハシマリ、かみハシマリ、かくハシマリ、かすハシマリ、とハシマリ、すハシマリ、とハシマリ、

延喜式タマハタハタ、主殿寮タマハタハタ、毎日早朝タマハタハタ、頭率タマハタハタ、僚下タマハタハタ、掃除タマハタハタ、御前タマハタハタ、及シテ、官掖タマハタハタ、

三十七

10

卷之二

伊氏 は奴  
とのりたとものゝやつて、やわらかのまげをあらうよめむ。

外の雲を加へて。あくびから小はながるの宿とほこ

あらばどのよりばくの人に世人ばくは故ノ名

禁秘抄 花人聚衆貞サ人也。位侍で然之輩補之。  
下ヲリテある人

一。雪山よあくばくんぐよバホウド。スコトメヨウキトモギはあくらハ  
感カムトモトモ。まどいあゆわわ。雪山ゆきとをもはぢやうだ。ばくけつはくともざ  
めで。○皇后宮職の大丈亮大進<sup>タチヤウタシニ</sup>進<sup>アシテ</sup>をまつまこと。詔勅のト候<sup>トモ</sup>す後

宇佐御起云、承天元正天宣養老主越前國与木曾國有  
岩名山有宝地堪<sup>タツ</sup>形不<sup>タツ</sup>多處也。中累記音說法之山也。  
神社考、自妙理推現者觀音之垂迹自在吉祥之化現也。小島山太

以事者妙理并之輔而觀音之化也大已貴者妙理并之輔而西利教  
主阿殊陀也号之白山三所擁現ま

神名帳云加賀國石川郡白山比咩神社云

さてうの山はくわゆか日。或部の巫忠隆使よりてあらん。とそひ所にて、  
波侵よと。本の御大字ののあらす。山宮の山はくわせ行ひぬあらうと。おゆのづがふとは  
うを経へま。まうあ。

今義解曰東宮謂太子所居也左傳云東爲春万物生長在東西  
爲權万物成就在西是君在西宮太子在東宮

家の東宮は三室院也。三室院方二の王子や正母贈皇后を越すと  
ト太祖太ト五家の末代をせつのかど貞親元年五月から生す  
寛和二年七月十日東宮よりて経す。かく一日。元服ぬま  
寛弘ハキニ月即位。内臣安久大少卿よめし

弘徽後アシヒノヒメをばくを経す

宋元物語の系図云。家子一室院弘徽後アシヒノヒメが内院太政大臣季翁女  
藤氏譜云實成親賢信寛如源翁の妹や万寿院十二月  
十六日生家。立候えま壬午崩。

京極どのもほくを経へまかどどぞ。

大くみよ。大政大臣の娘アシヒノヒメ九室うち。京極の位。  
こそ。七条河内守の娘アシヒノヒメ也。國とす。正暦二年九月廿二日。す。女アシヒノヒメ  
ま。小説恒通公とよき。足考是京極の元祖也

松葉抄

京極後ハタケ門南京極西南小町放入道長家

呂考今出河通長者町中立賣處ルのす。東西をいゆの極まる

場より面の少なじ。道長の屋敷也

清少のち 后まよのとおひるはあさごのすけ

のあくのミツアリとみのるの山とくわくありよきうし

坐シテや坐シテて、忠トシうきうえシテて、

ゆきこゑのうへーといひすね。あびくこゑみて。そへきはまつて

あらは内の内シテて、あらは内の内シテて、

あらは内の内シテて、

あらは内の内シテて、

あらは内の内シテて、

あらは内の内シテて、

あらは内の内シテて、

勘物云々長徳元年正月一日卯雪降ル

后まよこ清少の早天院の使長の事とある也  
よつてはねへどもあらわし。ぬいのおまかはりのゆゑなど  
きの直衣のまきあらとぬ。神のうへ。わざとみれおつゝみとをもとす。  
さひげあはせや。それよりのをめどりをわきかる。うへづとのをとくじ。院よりす。よどめく  
清少わからむとてあらぬ。

清少

規子内親王送る内親王を圓融院の姫妹。その兄は妙院也又

蘆中抄よ翼子内親王。妙院の附れ東院と立候六道院<sup>ミシ</sup>すや

妙院よりは一条院までの間妙院と立候六道院<sup>ミシ</sup>すや

妙院

妙院

妙院

妙院

后まよこ寝なよ。まごわらとぬ。あらわし。おとがめを  
まごわらとぬ。あらわし。おとがめを

清少をとがめ。あらわし。おとがめを

清少

清少

清少

後まよこ寝なよ。すすぐわらわらづらすうせあ林のまより。うはく  
かくを

前表よ雪

前表よ雪

前表よ雪

みかどて。やあらはるひげやあすげあど。うづげあゆふかばりて。内  
え言ありこ。れけぞがあらと山みハ。うづげやうあんやうて山うすわん。うづらのうづは

前表よ雪

前表よ雪

前表よ雪

前表よ雪

前表よ雪

前表よ雪

総領の事

店主の店を廻らしもとひだり

うふとてあゆむ。おとづれのこのまじめにあゆむとすなりかう

うちおろしり。雪の山をあゆむふうのくわやあくじよみてとまなげ

雪のすみと

越路

清忠

もあくろくからてみづひもあきこをぬへとまねど。うちおろして

正音

前月音

店主の食

清忠

ひそめらむらはなせんとねんすれど。七月をまかえすとねんすれど、お席も

ひそめこれとけとんとまかんがなよ。ふたりとすらへつをせなかまきまき

清忠

店主の食

本寺の尼食

清忠

おひはふ。人もげふ極きわめのとがどふ。湯ぬへるもおなせうあ。お房さきおきくを

清忠

店主の食

本寺の尼食

清忠

おひはふ。みだらひばくさかわらせ。こまわりとまの。はなびりまきまき

清忠

店主の食

本寺の尼食

清忠

くろもくめじようびひんかどくまひて。ほぬよあひとんぶのまきまき

清忠

店主の食

本寺の尼食

清忠

あそて。ひやすきのあくわゆり。ひわくべ。あくの。ひくわん

清忠

店主の食

本寺の尼食

清忠

とくべ。ひわくせり。まきせばくじめの。ののく。ヒドセキこのがくま細をくも

清忠

店主の食

本寺の尼食

清忠

まく。いそせきやくひやく。七日までまくひて出ぬ。うのむよ。これう

清忠

店主の食

本寺の尼食

清忠

うわめよ。あくふ。おれやけんすゆー。おとめよ。おとめよ。おとめよ。

清忠

店主の食

本寺の尼食

清忠

いゆめりや

すゆのる前よ。書し。日本記專領二字。讀太宇女キ佐女

タタメヲサメト

八雲ねよ。専下女也。細ゆいやしき女也。とあり。

節侯

七日之内せきのわらへ  
節候  
魚おうこ  
あらが  
すまおのむかと

わうひあく。ちよて毛ぬあらすみつれ紙たゆみておま  
四月六

やあ。十日の卯よハ五日えげつにゆきのくじ。まよ。十日の  
夜。雨。めでてくがふ。こねがすきぬひとめだくらわ。  
いゆて。も。二月をまかうつきて。と。よ。あ。あ。と。あ。げ。ど。と。人。ち  
あ。ぐ。あ。さ。と。わ。ぬ。人の。お。と。て。ゆ。く。と。わ。が。て。お。と。の。く。げ。と。お。と  
さ。す。ゆ。く。ち。く。お。お。と。ね。ぐ。お。う。か。は。く。ま。か。て。お。と。お。と。か。と。や。り。く  
雪。め。う。ま。う。げ。く。よ。な。り。て。く。  
音高下事  
清少 起居  
腰章  
あくまこ  
あくまこ

いせやうす。さあ滝のうみよわう  
岸アシ  
圓度タクのうめ  
孫恤シム云圓草ヒヨウ、縛也

卷之三

こりりとてかくへもよせ。あきらめよかてよむかみ  
めぐし。旅竹のじととくにんじん。あすかく  
まどかくよがく。あくまくまくとおゆく。うわわくかう。  
わざう。まくはくかくおおきなあたひ。さくらん

折檣 本をあげて夢のねや。相つむの夢よみも  
さくらがげあくじきりとすくらむりひくめでやくわく。  
入あくまづまくまくと  
おもむくやうのむのひじきそりくげゆううむむりよたりとひくり。  
清心 情心  
とあるゆうおへううううのうへん。人ふるうりばくへこせんと。うめきす  
吟誦の三字  
トつする。ひめうめうめうめひめ。づぶふつからくん。さくらふく

清心

清少の未審

五  
三

六

屈辱の風を覺

さばりありさんものぞよのれどもかへりんとひくんすれば

雪をさむれしよあをあよりうづふかを。そのふるみかわうきよどりゆき。おととめうづふかを。

わまくあを

なりめうづふかを。そのふるみかわうきよどりゆき。うつとりゆきと

うづふかを。そのふるみかわうきよどりゆき。うつとりゆきと

雪山の屋夢秘抄玉有。あらゆる事はげまし。この寝地下

廟けむる家を。うがせんがゆ。

雪を

左兵衛はくま。南のはからいのとく。ひめうすく。おもえ  
あんほのほとひやー。ば。あかうすとく。ようちのくらべ。の  
云ふるを ちうきみとすそひふす。うてもさかへて。いとおもひらり。

いとあく。ひくら。海上人きくも。ほれ。とくのすくわ。

いぬはくのひわく。つねど。おがく。とくらむ。くわすど。ねあま

わやせられ。人くくのくく。うかん。さざりのゆと。あらがく。

けい。ひき。ゆく。ふくろう。わく。うすわく。せ。ひく。

あくとよどく。わく。わくの人。あくとみづく。こわく。あゆく。

おひく。あく。おやく。あく。いと。うらも。あく。くわく。うらを

おひく。おゆく。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。

うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。

うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。

うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。

天子の衣を。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。

あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。

錦金也。其功用重價如金故制字從帛與金也。錦織紋也。出於蜀者爲上是說文の字也

かほぐら

西宮記曰。鎧叙東宮及參議已上節會時著之。東山左府御說云

鎧太刀節會及御禊行幸供奉公卿臨時祭使小著之

稱檀沉香木の木像ノ木見

英

はくわほとけの。ああひよ。けかがみあぐまさうる。からねれあり  
と。ふほのゑ人へうけめぐらん。かじき公達をもむきーも  
あああや物もの。こうみゆせてまほ。まますばくあどくとめでこも。

職原曰六位ゑ人又聽林<sup>アシカ</sup>色至極<sup>アツキ</sup>薦<sup>アシカ</sup>者<sup>アシカ</sup>是<sup>アシカ</sup>上<sup>アシカ</sup>  
湯服<sup>アシカ</sup>之義也 第二卷アリと存す

不の衆難多あぐの人代<sup>アシカ</sup>すもかどよて

ゑ人<sup>アシカ</sup>在校書處難多<sup>アシカ</sup>之穴也 無<sup>アシカ</sup>使<sup>アシカ</sup>也

夢松抄貞敵八人代<sup>アシカ</sup>皆<sup>アシカ</sup>湯<sup>アシカ</sup>人<sup>アシカ</sup>多<sup>アシカ</sup>子孫<sup>アシカ</sup>不<sup>アシカ</sup>施<sup>アシカ</sup>法<sup>アシカ</sup>左<sup>アシカ</sup>失<sup>アシカ</sup>多<sup>アシカ</sup>補<sup>アシカ</sup>え

人<sup>アシカ</sup>よ<sup>アシカ</sup>間<sup>アシカ</sup>ハ<sup>アシカ</sup>の下位<sup>アシカ</sup>の入<sup>アシカ</sup>下<sup>アシカ</sup>を<sup>アシカ</sup>居<sup>アシカ</sup>湯<sup>アシカ</sup>を<sup>アシカ</sup>受<sup>アシカ</sup>け<sup>アシカ</sup>ま<sup>アシカ</sup>り<sup>アシカ</sup>ま<sup>アシカ</sup>せ<sup>アシカ</sup>。也  
宿<sup>アシカ</sup>ば<sup>アシカ</sup>の<sup>アシカ</sup>近<sup>アシカ</sup>所<sup>アシカ</sup>宿<sup>アシカ</sup>も<sup>アシカ</sup>ゆ<sup>アシカ</sup>き<sup>アシカ</sup>あ<sup>アシカ</sup>う<sup>アシカ</sup>た<sup>アシカ</sup>も<sup>アシカ</sup>み<sup>アシカ</sup>う<sup>アシカ</sup>ら<sup>アシカ</sup>て<sup>アシカ</sup>あ<sup>アシカ</sup>水<sup>アシカ</sup>も<sup>アシカ</sup>み<sup>アシカ</sup>ら<sup>アシカ</sup>し<sup>アシカ</sup>も<sup>アシカ</sup>。也  
ト<sup>アシカ</sup>ゆ<sup>アシカ</sup>り<sup>アシカ</sup>の<sup>アシカ</sup>。も<sup>アシカ</sup>う<sup>アシカ</sup>だ<sup>アシカ</sup>あ<sup>アシカ</sup>き<sup>アシカ</sup>一<sup>アシカ</sup>も<sup>アシカ</sup>め<sup>アシカ</sup>い<sup>アシカ</sup>う<sup>アシカ</sup>く<sup>アシカ</sup>も<sup>アシカ</sup>。也。宣<sup>アシカ</sup>が<sup>アシカ</sup>か<sup>アシカ</sup>ど<sup>アシカ</sup>よ<sup>アシカ</sup>と<sup>アシカ</sup>あ<sup>アシカ</sup>。

口宣宣旨<sup>アシカ</sup>詔

五位諸大夫<sup>アシカ</sup>總<sup>アシカ</sup>口宣

上寫 三條大納言

慶長甲戌八月十六日

宣旨

藤原 三條大納言

某

宜<sup>アシカ</sup>在<sup>アシカ</sup>持<sup>アシカ</sup>津<sup>アシカ</sup>ち

ゑ人<sup>アシカ</sup>領<sup>アシカ</sup>右大辨<sup>アシカ</sup>藤原俊賢

奉<sup>アシカ</sup>

考<sup>アシカ</sup>古<sup>アシカ</sup>ゑ人<sup>アシカ</sup>頭<sup>アシカ</sup>奉<sup>アシカ</sup>勅<sup>アシカ</sup>げ<sup>アシカ</sup>其<sup>アシカ</sup>付<sup>アシカ</sup>遣<sup>アシカ</sup>上<sup>アシカ</sup>卿<sup>アシカ</sup>是<sup>アシカ</sup>曰<sup>アシカ</sup>是<sup>アシカ</sup>宣<sup>アシカ</sup>收<sup>アシカ</sup>吾<sup>アシカ</sup>家<sup>アシカ</sup>而<sup>アシカ</sup>  
留<sup>アシカ</sup>是<sup>アシカ</sup>曰<sup>アシカ</sup>宣<sup>アシカ</sup>察<sup>アシカ</sup>而<sup>アシカ</sup>其<sup>アシカ</sup>上<sup>アシカ</sup>サ<sup>アシカ</sup>口<sup>アシカ</sup>宣<sup>アシカ</sup>察<sup>アシカ</sup>近<sup>アシカ</sup>代<sup>アシカ</sup>位<sup>アシカ</sup>記<sup>アシカ</sup>後<sup>アシカ</sup>御<sup>アシカ</sup>經<sup>アシカ</sup>從<sup>アシカ</sup>五位下<sup>アシカ</sup>宣<sup>アシカ</sup>旨<sup>アシカ</sup>  
又<sup>アシカ</sup>其<sup>アシカ</sup>文<sup>アシカ</sup>同<sup>アシカ</sup>固<sup>アシカ</sup>可<sup>アシカ</sup>口<sup>アシカ</sup>宣<sup>アシカ</sup>但<sup>アシカ</sup>除<sup>アシカ</sup>宜<sup>アシカ</sup>在<sup>アシカ</sup>持<sup>アシカ</sup>津<sup>アシカ</sup>五<sup>アシカ</sup>字<sup>アシカ</sup>共<sup>アシカ</sup>直<sup>アシカ</sup>叙<sup>アシカ</sup>五位下<sup>アシカ</sup>者<sup>アシカ</sup>也<sup>アシカ</sup>  
諸<sup>アシカ</sup>國<sup>アシカ</sup>様<sup>アシカ</sup>目<sup>アシカ</sup>可<sup>アシカ</sup>口<sup>アシカ</sup>宣<sup>アシカ</sup>亦<sup>アシカ</sup>同<sup>アシカ</sup>布<sup>アシカ</sup>云<sup>アシカ</sup>ま<sup>アシカ</sup>家<sup>アシカ</sup>五位<sup>アシカ</sup>該<sup>アシカ</sup>大<sup>アシカ</sup>成<sup>アシカ</sup>レ<sup>アシカ</sup>時<sup>アシカ</sup>不<sup>アシカ</sup>給<sup>アシカ</sup>外<sup>アシカ</sup>記<sup>アシカ</sup>宣<sup>アシカ</sup>旨<sup>アシカ</sup>

自五位侍臣上緒か記宣旨又云以無廢以五位記式緒諸大臣  
坐位記文也

内宣者とて。荒人奉勅の宣旨を。宿荒人のおもと。天子の勅故  
荒人詔書て。その旨を直す宣下すと。内宣るとレ也。

大食キテのああらのづりがどもあう。紙シナガタをかきとやなう一の手ハ。  
荒人の心也。言葉人の心也。天人の心もよき也。  
いざからし。あまくわらへあんどうをゆがめし。

大臣の大食は穀甘栗の使ノミギリであふ。宿荒人奉勅タケルタマ。大臣の大  
食と大臣は御膳ミヤツクを食人ヒト大助オニ以下シモの記而メモで。食意エイあ  
る。即ちオニ云大臣家大饗タケルタマ。正月四日シモニ左大臣シモニ大食。正月五大臣シモニ一

膳タケルタマ用朱器臺盤タケルタマ甚日シキ御由ヨリ膳タケルタマをシテ聽是スル非アリ是シテ

所遣シテ舊甘東使並シテ餐食詠樂部シテある

西宮記。詰シテ舊甘栗事シテ近シテ荒人ヒト爲スル使シテ御膳タケルタマ五膳ゴシヤウ御人ミツメ御樹ミツメ  
荒人ヒト向シテ大下家シテ舊四屋シテ大示シテ二甘栗子シテ十石シテ上シテハ中シテ已上シテ盛シテ  
甲折シテ禮シテ合居シテ中シテ入シテ外居シテ中シテ使シテ荒人ヒト喜多シテ中シテ舍人シテ一人シテ石シテ、  
喜多シテト膳シテ之シテ向シテ大臣家シテト膳シテ注シテ多シテ之シテの應シテ喫シテ之シテ、  
詰シテ舊家シテ之シテ是シテ、  
詰シテ之シテの膳シテ后シテ御シテす

其後周礼天官シテ女師シテ者御膳シテ也。掌叙シテ汝王シテ之シテ慈寢シテ註シテ也。膳シテ者シテ、  
十一御膳シテ御シテ猶シテ進シテ也。侍シテ也。而考シテ也。位貴シテ當シテ代シテ其シテ御シテ也。御シテ者シテ、  
必作シテ其シテ膳シテ置シテ之シテ而シテ御シテ代シテ為シテ是シテ脅シテ也。代シテ首シテ陽シテ代シテ也。今シテ仙洞シテ御シテ、  
母シテ後シテ成シテ院シテ也。代シテ也。母シテ准シテ后シテ也。迎シテ膳シテ也。今シテ上皇帝シテ御シテ、  
金シテ非シテ大臣シテ也。其シテ膳シテ也。也。



天子東まき御内にて

卷之三

卷之三

禁秘抄 寛平小式已時ニスレントヲニ侍讀次謄曇也シテ陽掌同牒抄  
活之時文不の及時刻也侍讀後朝餉中間院主上卷古董有

誦習

前文を。三番(べき)めの序を。は不出で。やめ。序を。ひとめ。あ。  
法師の。らを。あらす。べて。りか。まつ。ふう。ほ。お詫者。の。を。も。と。て。よ。し。よ  
り。わ。わまく。う。中。う。て。め。か。ど。ほ。さ。あ。る。ふ。ゆ。じ。ま。や。あ。と。と。あ。ゆ。い。  
め。で。こ。き。や。く。う。あ。り。て。い。づ。う。ゆ。き。や。あ。み。と。だ。ー。あ。や  
つ。ひ。て。よ。お。ゆ。き。あ。が。と。の。じ。や。ふ。ほ。く。わ。う。そ。 店。の。い。な。の。り  
り。 中。ま。産。の。え。 中。ま。の。あ。く。い。ま。え。

立后の作は夢中の事と云ひぬ大床子とあらゆる。こゝに定す  
の皇后富士山から糸引ばくめの事。又の院室子の内へとせりふ  
也。活誕生を重よてある。思あまて坊よりせむや

又の夜。室はの母一日ぬよ。室と弟と子とあひ。室ハあらず。室  
おうてうら高や。妻のもの多めと。夢中みて室はめりふ  
き。あいぬ。大ちやうじゆをばよてとあひて。帳のあふふくいすへ  
元日の節。即位かゞ小。华人猶<sup>シ</sup>ミテ<sup>ウレ</sup>猶太のほそて。いぬの声をあげて  
君とちやうかみ。延年或<sup>シ</sup>よ。能<sup>シ</sup>もここ西あつまむち後<sup>シ</sup>  
心也。大床す。林帝小大床子す。あやけくふとからあく。  
宿膳すゆちものや。常<sup>シ</sup>小と重厚供<sup>ゲゴ</sup>也

内膳改へはひやうすりをひきどへ

竈  
火脇の飯の事

內膳司。正八相當正六位上。唐名尚食奉御

職原令内膳司奉膳二人掌<sub>下</sub>總知湯膳<sub>上</sub>進食先膏事<sub>下</sub>  
主事<sub>上</sub>而<sub>下</sub>すのうちをや。而のひ急不の間<sub>上</sub>こ<sub>下</sub>もあまきど<sub>上</sub>まくし。あぐんと<sub>下</sub>そばぬそ<sub>上</sub>らせ行<sub>下</sub>ね。

又の後は家へゆき難を  
まへて、其處をゆく

アリカタ

職原故執柄必蒙一座之宣旨故稱一人是今五指政也

春日山房

大さみか。春日がりまき。けもの一衆の院の活けぢりげ。どくね  
ぞく。うるふはくわくわくね。せぐらうらうらうらうらうらうら  
はくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく  
はくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

葡萄坂六力堂の店で  
お手す。

多<sup>アシ</sup>きものあり。すべてじつにあらへるがよ<sup>カシ</sup>くあへーをあし  
らも<sup>アシ</sup>る紙も<sup>アシ</sup>は紙の花が中<sup>アシ</sup>で<sup>アシ</sup>をかまほ<sup>アシ</sup>うござり<sup>アシ</sup>。お<sup>アシ</sup>さ<sup>アシ</sup>く  
をめても<sup>アシ</sup>。金の<sup>アシ</sup>ごりぬすぐのおり<sup>アシ</sup>かかふる。お<sup>アシ</sup>はのゆ<sup>アシ</sup>が<sup>アシ</sup>り。  
のうと<sup>アシ</sup>お<sup>アシ</sup>ゆ<sup>アシ</sup>のあらわす。今<sup>アシ</sup>のまゆ<sup>アシ</sup>わ<sup>アシ</sup>よ<sup>アシ</sup>お<sup>アシ</sup>す。  
ま<sup>アシ</sup>す。お<sup>アシ</sup>父<sup>アシ</sup>上<sup>アシ</sup>を<sup>アシ</sup>部<sup>アシ</sup>き<sup>アシ</sup>の<sup>アシ</sup>や<sup>アシ</sup>。お<sup>アシ</sup>じ<sup>アシ</sup>あ<sup>アシ</sup>り<sup>アシ</sup>。お<sup>アシ</sup>ま<sup>アシ</sup>。

一象院の第一乃皇子。敦康親王の御子也。故母皇后を定  
子あわじ。故叔父小内太官伊周。中納言隆家卿。上達部也。  
名上人をめつて。故るむせて。故後（全生のまゐる）。あそげせも。ゆふ。ゆふ。  
おげせど。やねばゆれ。常まくやまとこの上乃みまきをり。す。清少納言（あやめ）。此  
おげせど。やねばゆれ。

### 清少納言旁註卷第五

・かあめり  
寂媚の二字

捨家清花の子息也

わざやふまよげだふ公達ひを表。すゞに。たゞぐのうわづや。し。  
うげけぬが。わざとす綻。汗衫ちまく。あく。わざとす。  
墨重こく。くすこ。あだなづはづて。きの櫛くしのりよわす。さう。くすてあづま。  
わざとす。おげのう。夏のぬ。悽きびしそう。あま。あま。わざとす。  
わざとす。おげのう。うすやのう。し。のう。村濃むらのぞ。あま。あま。  
わざとす。おげのう。柳やなぎ。柳葉やなぎの葉。柳葉やなぎの葉。柳葉やなぎの葉。  
文はづる。おげのう。おげのう。おげのう。おげのう。おげのう。扇おうぎ。扇おうぎ。扇おうぎ。

三さがひの扇。いつをもあわほけて。もとあやめ。げかわ  
扇扇のあ方のとこまひはを。もとあすやもて。ほも。もく

乃ゑ一ても。すゑをあつべじすばよ活て。ねむや。  
捨破子 三書うの裏  
よくあくかひつわ。白きらみびりき ほくくもあく。  
あくあく。いわきよひうぬうかく 麗 蔡  
すの下よ朽木のあきやく。ひよひよせよかくひもろ  
かくあびくまくもくもくとれり

禁秘抄曰。四面有儿帳。帷夏生絹。以胡衫。盈芦。准冬。挂木形。  
木夙衣。立。未のこわう乃。あきやくあ。すのくらうんれわくよ。いわく。ご  
をふ袖。の。あくそくひつかよ向き。ゆく。く。うち。れ。緒。くひつみて  
いふ。ゆく。よ。か。め。く。り。五。月。の。せ。う。れ。あ。や。め。の。元。人。ま。ぶ。づ。ぐ  
乃。あ。い。の。名。ふ。を。ほ。く。ね。と。い。じ。く。い。き。と。ど。く。じ。く。い。く。く。  
達部 猶。是下茶玉祝也。何。手。手。破。也。

だらめかど。あらうか。絪。ゆふ。す。ま。も。く。う。う。か。す。め。く。と。り。く  
蓋絹。舞踏。拜。よ。ま。射。也。是下茶玉祝也。菖蒲奉事也。何。手。手。破。也。

赤絹を五節。きの附。紗。袖。あ。も。て。わ。か。じ。す。び。袖。て。泥繪。  
な。ど。き。て。左。の。肩。小。こ。袖。は。く。る。の。は。菖。蒲。の。づ。く。の。あ。つ  
絪。内。多。あ。る。で。あ。ま。き。袖。り。や。  
火。そ。り。の。わ。く。

五節ノ席帳。席。と。ま。を。も。く。あ。め。  
ラニ。席。の。き。あ。セ

小忌の更。す。ち。も。く。あ。め。  
セ。テ。新。嘗。會。ノ。辰。日。豊。明。節。會。山。ある。モ。テ。柳。柳  
か。を。と。み。の。を。五。す。や。二。の。ま。セ

在前人前は後

真音 漢 番號ハ傳の時也

舞娘也

位のあはまろとのぬすゞ

此時のあはれの事人多良のやかまづ

公事根源五郎 母の日あら附上の母の日付用ひ。或を下の母因也。

公事根源五郎 母の日あら附上の母の日付用ひ。或を下の母因也。  
若相公異見曰五郎、舞妓者大嘗會の時、五人皆預叙位甚  
候年々新嘗會時四人又曰折良家子未嫁者置為五郎妓  
度定すちまのあはれ出よせりよかづきナ二人向

まのあはれ出よせりよかづきナ二人向

事へたる交絆たりかほりあはれ。又うやうれ事あるも。これより行ふる。

江戸や十五郎の事童女傳といふ是也

移家清花きのあはれ。臣下の方、其院をまわる舞娘出勤するよみを也

おとてあはれをまわる人皆は歌く。やうごころうそすうじこくくふ

歎息歌 お子うみ紹也。後づれも歎息歌と云ふ。言ふてと中止  
定すれど。

女院何うあがくや 中官定す方よ  
いづ小あはれす。うふのや房浦十人歩をす。いふゆるを。女院をのひや

の人やびげくと聞る

定す伯母也

女院東三索院詮子也。一女院の母后。法奥院接取ゑ家元

拂女 女院を是中まの隠居也。天子の母也

相手や 德景舍 三索の院乃女院中園白道隆公法女。女院内侍定す娘也

清少納言も後づれ方よ候すうち。宋花物語よアキ

辰の日代名拂のくろまね。うづみ拂ゑ沙也

花鳥余情云。舞妓の名東。丑の日ハ赤色の唐衣。寅の日ハ青色

店名。辰日ハ毛拂店也。未絶日彦づるあや

女房す。ふうにてひもあひだ。筋上入るもまきてひもどうして。もふ

葉が重い。さうしておはなを  
さうしておはなを。さうしておはなを。  
みじめむすびくつじやうしゆあらわす。  
絵はかで見るの。がくのうはうを。  
おはな  
赤紙  
握

一禪室紙（古傳更  
アラシ大嘗會ハセイの説。小忌コノヒと云ふ神カミの衣服ウツメ也。卑  
布張ハタケて山蓋ヤマガシをつるまで。櫟木カシキ櫛ハシ伊イがすも。大オき鷦鷯トリ也。

あらゆるがくをかよ。わたくしのまことあらわす。下づくとて  
おもひつぶせ。上を御友上人。おもひとおもひと。おもひ

也房とつあら。お忍の公達もとくにゆく。ありひきどん。お節のはぐ  
葉姫のちよをあつむ。葉裏あわせざまくあむ。葉姫をめく  
承とりえられぬが、ふらかうじらすりて、いとほやしもとあすみ

さういふときの麻まうす  
本のあれど窓やまくらもあらずと  
げゆくよしまたハナヅ。な帳ともてかくわびゆきこがれゆうり  
五郎の月の音人也  
小舟湯とうすがわうひものとひくあは。これとじすゞやとうぞ

是后家の女房也。前書陸々御事御方送の西行。

亥方の中ねよろてはくうすよとあらば

勘物云 實方正曆二年九月右中將充右馬頭五年九月  
八日左中將長德元年正月十三日陞奧守其夜昇殿九月十  
七日申赴社由居御前叙正西位下

めのやあ井代もさういふは、のうかひものよ

拾遺集雜五言古詩。此卷中所載者之大半也。其餘之多在後集。

卷之三

是則人のけむすゞ事わざもひのく

アヤシム本文讀ふにてト西かうわべ。  
少焉事を妄す。或は絶えども、あらうる事はなき也。  
とひく。心をもとのまへのまへにけりのれ。もともつて、ゆゑやある。  
旅使。高野城。

技実方の山の舟を。お向よりてとあそび。とくに。はうて。港より  
ひざ。高橋を。日暮ふゆ。ひそか。と理り。とせ。ひづけ。とゆ。  
まく。じと。すのこ。是を。清淨を。ゆよ。とて。神を。よむらゆか

卷之二

居間の事房  
少喜房  
と。女の方もおまかでござります。國入はれ、おまかでござります。  
みゆきあひて、おまかでござります。  
「春の、吃の室」  
声女  
みゆきあひて、おまかでござります人の、いのどうはくらむ。  
どもおまかでござります人の、いのどうはくらむ。

廣雅

后漢書

卷之二

七四

中くげらかへしらへてよわし。柳のわらをくわがふうや  
まといどん入わる人ひとのこすりせし。わらがまちにむらで、  
うすいはさみもあらわらにむらで、わらがまちにむらで、  
まをばだわらとくらふき、げかめし。まひもめすげ下きのじゆのま  
じすえ。

菅原氏譜。公卿補住菅輔正、右中弁淳茂孫勘解由長  
官在躬朝臣男母從五位上常陸助管景行女正暦三年正  
月十五日叙從三位時朱雀院御遺賞式部太夫如元寛弘  
六年十二月廿四日薨八十五。

そめどく式部卿のまひ。乃はおもてのまひ。廿二ノ  
七日也。あり。

紹運錄。村上天皇子す爲平親王爲染殿式部卿官  
属。追からゆく跡。之の跡をひづきの跡をさうべ。やうて仁喜庵よりゆりて、清涼  
庵のまひす。どうも草がれはまきみて。このまつがねへまつり。柳  
のわらをくわらへりとほきて、さきとげあらかわのへのとてやま。まのゆき  
かくとくらへりとほきて、さきとげあらかわのへのとてやま。まのゆき  
東山左府説。荷繪細釦。所用之金紋丸柄。多必用之。  
白地平諸小忌之外不用之。

記。坐波平諸節。舍りませ用。飾銀蝶。物。多財。  
大墨。坐波。又多。多。人。多。用。納。地。平。諸。多。多。  
の。財。多。叙。位。除。同。執。筆。多。の。時。多。緋。地。無。し。ば。か。多。墨。堂。

卷之三

封下

ば候。又候は見てかんじて。ゆきがとあるはくらがもゆくわ。

又毛う五節のを

内幕を五節のを

細工

物を付ふる

彩色

よもづきがど。あくろさつ候。ものとせばやうしてまつてあ

きくもめでてくもの。清涼殿のをあくろ。とゆひのじと。ひりゆ

童

五節の色あくろますもと

上

雜事

りて。あくろ。さあくよつて候。うのとあくろのひだり。乃

うけあくも。あくよくとあくいも。あくも

五節の色あくろますもと

下

輪橋

村濃

氣爽

江次第殿上四角各十五節。西殿垣下四角各設假切懸自請

涼殿東廂北階下到秉香殿坤角假作長橋

紹巴のえりとひはけ見そめのや。又や候もあくや。あく五

脚ろまし附一也。

山三藍手す物候。日暮のをう。五節の用意。柳

やあうのひげ。あとやかく。あひく。かくす。あく物。まとひ

くひく。うかぬ。

柳衣ハ硯短策勑冠。又追善の阿經巻。すゆう基臺也。柳

けくら。上のひごと木三角。す。重半代保あり。三重院殿の後

よ。吉事。よそすみ。追善。の。吉事。よそ。重院殿品也。

又すゆら。の。を。堅。す。く。搖。す。ゆ。か。か。く。ま。だ。く

五節。大。ま。き。手。序。筋。腕。番

え。ハ。も。や。未。考。

ま。ち。か。く。と。つ。て。う。き。を。う。ひ。く。房。ど。の。前。わ。か。な。く。い。く。

五。節。よ。あ。ね。よ。う。え。

あ。の。お。か。れ。や。

き。す。と。あ。ひ。と。わ。し。り。の。を。れ。れ。わ。か。ね。あ。り。あ。く。

清

きくふみゆ。萬事よみのあはるかと  
出でぬきアラメソリ。このうきあらゆをあめや。悔其事のおり  
廢殿敗<sup>ホウテンボウ</sup>。五郎のものかち計<sup>ホツラノモノカチケイ</sup>  
五郎のふま<sup>ホツラノフマ</sup>。火取、音萬の意計<sup>ホツラノヨミケイ</sup>

タの爲人<sup>ハタクニシテ</sup>。うそそく、うのまわい。えやうぢうづくま  
まことをなして。あらゆることをいとこなく。名上人をたる。ひむねは  
まのけふ。萬事アラメソリ。うきあらゆをあめや。房。二  
十人ばれ<sup>ハタクニシテ</sup>。押慶<sup>オカシ</sup>。御内<sup>ミナム</sup>。宿是<sup>スル</sup>。  
がわきに。あはるかと。ひまわく。ひとづら。あはるかと。あ  
もゆえ<sup>ハタクニシテ</sup>。そしアリツヅム<sup>ハタクニシテ</sup>。かづまとも。あ  
はりゆえ<sup>ハタクニシテ</sup>。おけよ。ざくらん<sup>ハタクニシテ</sup>。おけよ。すん

主上<sup>ミサマ</sup> 舞院

江家次第云。天平十五年五月癸卯宴群臣於内裏。皇太子  
親舞五節。中壬日張臺試宣日御前試同童女帝覽常寧  
殿。西塗龍內帳臺上敷長筵。其日可敷舞姬座。其前各  
立白木灯臺一本。舞殿戶下立床子一脚。東帳臺坤角  
引慢為小歌座。北廂塗龍內為大師宿。西大歌俟。同殿東  
假屋。

藏事頭行事藏人立殿東戸下開闢用床子舞間禁  
闕入理髮童女陪從下仕之外不可入。頭若藏人之外不能禱。  
戶外舞姬未次第參入。經馬道入舞殿戶  
舞者五節。其先の事アリ。

不二久  
文

卷之三

是より樂器の上に落成す。其後  
もやうどくは既成のゆゑとて、  
其上ノ事。かくして沙翁の如きにて。

後漢書  
無名氏  
高麗書

重名 榊琴云上東門院名物也或說幃丸既上東門院今  
生滅時之夢之時為因祿燒失畢

勘物云。隆圓。隆家兄弟也。正曆四年才少僧都。十五不經律師。  
寃弘八年四月才大僧都。長和四年二月卒。世七。

多榮集序二隆圓大僧都中園白沛息母馬內侍

或記少年の人生僧纏の初。享二代一茶院。古字。正暦五年。  
十一月。陰圓十五歳。而して真性の僧都。是れ左大覺寺

原道綱弟亮子也とあり。

# 琴

まのふかめでて身をうんじよ。ひくらせぬとよ。まきも  
りせむはてお体をとく。ゆのくに。あらわすとよ。  
陰陽の。まことの。ゆめの。まことの。まことの。まことの。  
あらわすとよ。お体をのびこまへよ。またお前へつまへじよ。ま  
くらのよ。おまかせくらがく。うふ。おまかせくらがく。ま

۷۰

卷之三

江詮云不智是望名也唐人賣之千石買伊奈加倍之多  
札波號爲名

この馬の名は僧都の名である。寺を古経ばかり多くある。隆円の  
あめうか。こもと先を手代にいはばりうしよおほきうく時もゆくのゆあ  
みつあくじとふ。ほのまのまくぬや。山高木高木もく。か  
あくらも。めぐらす。おなつまく。しのわき。堅忍え。あんじやう  
牧馬  
謂橋  
無名

方上禁秘抄ニ方上累代寶物也置中殿御厨子根源様人

不知之掃部頭貞敏渡唐之時所渡琵琶二面其一也

或之方象吞青鉢之水謂号方象又方上宰相獻延

嘉帝号方上兩說也但妙音院入道付方上說守

師時記曰方上繪樣於馬上。方述者指述於腰形也

牧馬拾校云牧馬与方上一雙名物也

故事詮曰信義四雅三傳息信明傳雅三傳息兩人不知勝劣

初信義彈五方上信明彈牧馬更無甲信明彈六方上信義  
彈牧馬其色雲泥故時人皆云信明超信義七方上勝牧馬  
升八江詮云井手九琵琶高名者也延喜孫十五官子愛官  
申人琵琶傳今在宇治宝藏拾校同

いづれ江詮云謂橋一為堯又高名琵琶也三条式部卿宝物也  
松目  
寔  
安

まこと和琴あやも。うつめらうやくゆすめとあらうぞ因ゆ

水童

字多

新步

畫ニ

辛

すいろうふづのう。うみはー。くもくらはくもく。あかくわにむかく。  
閑室しかやわすれよ。

和琴

あはうかく。神代より。うら張ゆべあ

えきおノ絃と。ほの琴にはくもく。方弦城がて。通す。日宇  
樂器の。のらや。玄高角徵羽。文。緒と。すのをとす

也。鎮座本記より。あ

朽目

拾芬曰。朽目或朽部。入鬼褐袋。和琴也。

捨寢

拾芬曰。承平元年九月五日入日。和琴也。

二賀

拾芬曰。勘物和琴也。

水童龍

い終ち横笛者大水童小水童天晉御財富物。拾芬同

字多。江。江。日。寛。平。江。室。所。和。琴。拾。芬。寛。平。江。室。李。童。  
餘。有。是。名。或。說。稽。作。之。一。條。院。内。裏。燒。亡。時。燒。七。

釤少

拾芬苗部

名少

次。拾。云。第。二。者。高。名。横。笛。也。另。朱。雀。門。鬼。笛。是。也。

淨。慈。上。人。吹。笛。諱。史。朱。雀。門。鬼。大。色。感。之。自。不。是。笛。給。件。  
聖。人。其。後。次。第。傳。之。在。入。道。殿。後。一。條。院。之。諱。在。位。之。時。以。  
藏。人。某。否。此。笛。藏。人。不。知。笛。名。只。は。ま。せ。紹。テ。少。也。

入。道。後。ゆ。少。也。形。是。笛。こ。う。と。是。か。ま。く。れ。も。く。こ。う。

葉。この。笛。ひ。そ。と。ま。進。紹。と。も。

さき。余。要。付。か。し。各。詞。多。一。言。種。

宣。揚。風。の。一。ひ。ま。よ。の。お。と。と。お。と。お。と。お。と。

西言承ミ納後黒代ハ物在宜陽後眞後物納人所ニ

源氏主事のよ。この正琴うを宜陽免めよ。代<sup>ハ</sup>ニモキル

名古ヒ山琴う。細酒<sup>ガリキ</sup>ニ宣陽後苦<sup>ジ</sup>ニ余思<sup>シ</sup>ニ移<sup>シ</sup>キテ

是すえ別の<sup>アヤ</sup>

トハ乃ははかのうすおまへにて。後上人日ひも琴箇山<sup>アシカ</sup>。あそび<sup>退出</sup>  
く<sup>シ</sup>く<sup>アシカ</sup>でわきかわ。まくかうしをとく<sup>シ</sup>ねり。むく<sup>シ</sup>く<sup>アシカ</sup>  
ゆけ<sup>アシカ</sup>で<sup>アシカ</sup>ど<sup>アシカ</sup>の<sup>アシカ</sup>。外や<sup>アシカ</sup>て<sup>アシカ</sup>船<sup>アシカ</sup>。<sup>アシカ</sup>あ<sup>アシカ</sup>い<sup>アシカ</sup>  
店<sup>アシカ</sup>の<sup>アシカ</sup>引<sup>アシカ</sup>お<sup>アシカ</sup>。ち<sup>アシカ</sup>か<sup>アシカ</sup>れ<sup>アシカ</sup>を<sup>アシカ</sup>も<sup>アシカ</sup>を<sup>アシカ</sup>せ<sup>アシカ</sup>。

張

店<sup>アシカ</sup>の<sup>アシカ</sup>業<sup>アシカ</sup>。

まくはく<sup>アシカ</sup>か<sup>アシカ</sup>も<sup>アシカ</sup>も<sup>アシカ</sup>。まく<sup>アシカ</sup>。まく<sup>アシカ</sup>。まく<sup>アシカ</sup>。まく<sup>アシカ</sup>。

光<sup>アシカ</sup>

湯<sup>アシカ</sup>の油<sup>アシカ</sup>。う<sup>アシカ</sup>く<sup>アシカ</sup>と<sup>アシカ</sup>。ま<sup>アシカ</sup>せ<sup>アシカ</sup>。ひ<sup>アシカ</sup>で<sup>アシカ</sup>ま<sup>アシカ</sup>。そ<sup>アシカ</sup>う<sup>アシカ</sup>ほ<sup>アシカ</sup>。

倡家<sup>アシカ</sup>。

歌<sup>アシカ</sup>。延<sup>アシカ</sup>経<sup>アシカ</sup>。す<sup>アシカ</sup>平<sup>アシカ</sup>方<sup>アシカ</sup>。海<sup>アシカ</sup>。朝<sup>アシカ</sup>。抱<sup>アシカ</sup>。

倡家<sup>アシカ</sup>。あ<sup>アシカ</sup>に<sup>アシカ</sup>。あ<sup>アシカ</sup>に<sup>アシカ</sup>。あ<sup>アシカ</sup>に<sup>アシカ</sup>。あ<sup>アシカ</sup>に<sup>アシカ</sup>。あ<sup>アシカ</sup>に<sup>アシカ</sup>。

中<sup>アシカ</sup>。

わ<sup>アシカ</sup>あ<sup>アシカ</sup>。う<sup>アシカ</sup>け<sup>アシカ</sup>。や<sup>アシカ</sup>う<sup>アシカ</sup>。う<sup>アシカ</sup>ふ<sup>アシカ</sup>。ま<sup>アシカ</sup>せ<sup>アシカ</sup>。ひ<sup>アシカ</sup>く<sup>アシカ</sup>。

中<sup>アシカ</sup>。

わ<sup>アシカ</sup>あ<sup>アシカ</sup>。う<sup>アシカ</sup>け<sup>アシカ</sup>。や<sup>アシカ</sup>う<sup>アシカ</sup>。う<sup>アシカ</sup>ふ<sup>アシカ</sup>。ま<sup>アシカ</sup>せ<sup>アシカ</sup>。ひ<sup>アシカ</sup>く<sup>アシカ</sup>。

中<sup>アシカ</sup>。

う<sup>アシカ</sup>あ<sup>アシカ</sup>。う<sup>アシカ</sup>け<sup>アシカ</sup>。や<sup>アシカ</sup>う<sup>アシカ</sup>。う<sup>アシカ</sup>ふ<sup>アシカ</sup>。ま<sup>アシカ</sup>せ<sup>アシカ</sup>。ひ<sup>アシカ</sup>く<sup>アシカ</sup>。

中<sup>アシカ</sup>。

名<sup>アシカ</sup>。

館也

廢

井戸中の中のあらわがふきぬはあらうかまく。雨ともうか。東の  
うの雨つうどうあらうと。あらう西へあらうとある。

右中持近位好親号井戸少納ヨシナガス 畠口右季カモロハセ  
窟の内えれどよしけりもむすびやうな形カタ ひのうすりよしけりもおひいと。あらうをげねがまよしと  
居ます

詞花集入。わねますと日出高す。あまきのとすや。りよじん  
て日向候。あらう長雨をとすり  
あらう。ひづくかせむけ。わねひづくかせむけ。とひまく候。あらう  
とあらうをとすりあらう。なま。

わねすとれりやくととのつりあらう。がくとやうつるほよ。文字  
ひづくかせむけ。わねひづくかせむけ。とひのとひのゆめひはうりと  
おもてけり神かまめまひ。げやうるをむすばざらう。まことつ  
ゆよわひよかむとねよ。 はらう  
まちのわんよとねよ。 まちの

拾芥云南院、京北烏丸、西小京都院、御領、又云京北主生西

是忠親王家

五考云、中國道陰之家と云。

道陰院

西のものと云ふにほりす。あらうにほりす。せんぐんすくあつまつて  
せんぐんすく。あらうにほりす。あらうにほりす。あらうにほりす。

禁秘抄、波板二行多ニ重、放黃端名在名上、之れ不論、花榜

諸御非通又至、蓋以不名北副高欄立布障子アラシ

南院

卷之三

不  
音

身  
不替  
持の事  
主と高財也

中孝の女房うそて妻考男曰金夫也。是故余者有命爵矣也。  
ひそくめひげそうちをまつち。ゆきのよみゆきはひづがもし。  
さゆるふせとづば。どうめもあらへまくひをまくすかわらが。内せあ  
せんとすれりやまくまくらむ

あめくげのじゆのまこと。あめくげのじゆのじゆま  
れもよゆくげはう長やう長ハセタ余や。うのじゆまくね

也。仙人之言，如無事也。

おぬのまへと陳へて只の御心

天子中ま后御主のを垂波也  
えんわゆゑり。かみ経三郎のそらの御てくねわん。あまきめをも  
おひはんくよみ神事にて。國むじのいとしむじやて。源  
少納言。新中納言をり人のものうげよめじ経ひ。御うなぎやりく  
みふれしとおこりしと。これとよそののりとせ行ひ。とくわい  
はくしと。おもとあじと御あそび。  
是すうふるまのや 使タメ  
守ムサシ。おへる。かくやあかど。さかどよくゆきよ。わうば  
あやまちうどくよくゆく。わうがとうわうがと。人め拂ふとあむけと  
す。あやまつてうとくよくゆく。わうがとうわうがと。人め拂ふとあむけと

傳  
使  
かくやくあす。とわざうてゆくのむかよ。ねづば

奉事あるをしよ

恭 薄

長 銃

持

鋤

提

兵

弓の

始

制

兵

馬の

始

制

兵

刀の

始

制

兵

槍の

始

制

兵

矢の

始

制

兵

火の

始

制

兵

刀の

始

制

兵

槍の

始

制

兵

火の

始

制

兵

刀の

始

制

兵

槍の

始

制

兵

火の

始

制

兵

刀の

始

制

兵

槍の

始

制

兵

火の

始

制

兵

刀の

始

制

兵

槍の

始

制

兵

火の

始

制

兵

刀の

始

制

兵

槍の

始

制

兵

火の

始

制

兵

刀の

始

制

兵

槍の

始

制

兵

火の

始

制

兵

刀の

始

制

兵

槍の

始

制

兵

火の

始

制

兵

刀の

始

制

兵

槍の

始

制

兵

火の

始

制

兵

卷五

風情の事とあ  
いはうつてゐる

卷之三

卷之三

まかずとひふあひての下り。かひがふたりといひかなや。  
剣一毛也。  
人の手に持てぬ。まかず。たゞ人のいもをうへてあがへ事。  
酒  
毛也

多々おも  
う

ト勢の  
つひへうねくかうすすす。あがめちとふくらまきゆゑく。げすせ  
たれせ  
のうねく。さげのうちど体。まのびくらよ。かうくわくまく  
豪へあきほ  
。あ  
。直以  
うそあをげ。うそあをげ。まのびくらよ。かうくわくまく

を嘗め

うらうらが。やまくすが、どもおぢかぬ。が、ちゆくよからまく。  
人のいめうとをだつてきみがはづり。人のおもてのぐらう。

音楽調子を知らんや  
人のまゝとえ  
留

よき事の如き  
名前をあらわすには何よりの事也  
アラタナガシマサニシテ  
障

白氏文集樂府云石上磨玉簪玉簪欲成中央折  
憶之大可為也

高木のうちの事。まほのうのうかのうを。不せまひに  
きみやく。じとくとおもひつ。あくゆびてこらして。あくゆ  
あやか。人のあくよび。ま事。けふまうらうともおと  
あるひどく。まほまほとまほ。おとまほ

曉がくかあいもくわすれて。ゆりとふ。かくのひらえ。  
甲<sup>カ</sup>也  
ク<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>。うりとあぐねば。ひるよひりと。いわきま  
東方朔鴉經<sup>カ</sup>。第一<sup>カ</sup>。即甲<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>。八十<sup>カ</sup>千<sup>カ</sup>數<sup>カ</sup>。辨其緩急<sup>カ</sup>  
吟定吉凶<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>。續詞部集<sup>カ</sup>。戲咲部<sup>カ</sup>。大僧正忠<sup>カ</sup>  
惠<sup>カ</sup>前<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>。あゆきをうそもうかやめ<sup>カ</sup>。いまはかうとご承<sup>カ</sup>うけ<sup>カ</sup>ら  
て<sup>カ</sup>げ<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>ふ。むげ<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>。みどりの<sup>カ</sup>み<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>  
じ<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>。あく<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>。ものうりこり<sup>カ</sup>。あが<sup>カ</sup>  
あこ<sup>カ</sup>。のゆ<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>。お<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>げ<sup>カ</sup>ー<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>矢  
乃<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>げ<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>。とくとくゆき<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>

生軍根源<sup>カ</sup>。賜<sup>カ</sup>十八日。是<sup>カ</sup>天子<sup>カ</sup>湯<sup>カ</sup>宿<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>。うらば

後<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>。仲<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>浦<sup>カ</sup>かう<sup>カ</sup>。れ記<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>。左<sup>カ</sup>右<sup>カ</sup>近<sup>カ</sup>  
濱<sup>カ</sup>。左<sup>カ</sup>太<sup>カ</sup>吉<sup>カ</sup>濱<sup>カ</sup>。府<sup>カ</sup>の人<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>射<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>。左<sup>カ</sup>太<sup>カ</sup>大<sup>カ</sup>射<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>。射<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>多<sup>カ</sup>  
也<sup>カ</sup>。賜<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>。ゆけ<sup>カ</sup>る。冠<sup>カ</sup>酒<sup>カ</sup>純<sup>カ</sup>経<sup>カ</sup>。まこと<sup>カ</sup>賜<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>。帝<sup>カ</sup>承<sup>カ</sup>  
參<sup>カ</sup>。わざ<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>濱<sup>カ</sup>。安<sup>カ</sup>飲<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>。あく<sup>カ</sup>。事<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>。大<sup>カ</sup>射<sup>カ</sup>  
み<sup>カ</sup>饗<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>。是<sup>カ</sup>神<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>。

江次第<sup>カ</sup>四人立<sup>カ</sup>具<sup>カ</sup>後<sup>カ</sup>射<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>在<sup>カ</sup>南<sup>カ</sup>者<sup>カ</sup>二人射<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>後<sup>カ</sup>退出<sup>カ</sup>次<sup>カ</sup>者<sup>カ</sup>歩<sup>カ</sup>進<sup>カ</sup>  
又<sup>カ</sup>待<sup>カ</sup>次<sup>カ</sup>者<sup>カ</sup>到<sup>カ</sup>來<sup>カ</sup>退<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>路<sup>カ</sup>左<sup>カ</sup>近<sup>カ</sup>者<sup>カ</sup>泛<sup>カ</sup>射<sup>カ</sup>場<sup>カ</sup>北<sup>カ</sup>砌<sup>カ</sup>退<sup>カ</sup>左<sup>カ</sup>近<sup>カ</sup>者<sup>カ</sup>自<sup>カ</sup>立<sup>カ</sup>  
東<sup>カ</sup>面<sup>カ</sup>北<sup>カ</sup>間<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>郭<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>退<sup>カ</sup>若<sup>カ</sup>彌<sup>カ</sup>断<sup>カ</sup>者<sup>カ</sup>畜<sup>カ</sup>袖<sup>カ</sup>跪<sup>カ</sup>地<sup>カ</sup>取<sup>カ</sup>虧<sup>カ</sup>絆<sup>カ</sup>摔<sup>カ</sup>懷<sup>カ</sup>  
中<sup>カ</sup>以<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>目<sup>カ</sup>彌<sup>カ</sup>掛<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>。方<sup>カ</sup>場<sup>カ</sup>極<sup>カ</sup>張<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>。先<sup>カ</sup>彌<sup>カ</sup>引<sup>カ</sup>次<sup>カ</sup>者<sup>カ</sup>於<sup>カ</sup>其<sup>カ</sup>座<sup>カ</sup>鳴<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>

後<sup>カ</sup>收<sup>カ</sup>脇<sup>カ</sup>文<sup>カ</sup>立<sup>カ</sup>

・うち御身の

節會。佛名は雪ゆうで、龜の形をもつてあ。

元日の節会。白馬節会。瑞虎の節会。是が三節会也。  
このかはモ明節会也。いぬを父の節会也。元旦の節会也。  
但佛名はばくじゆくも。十一月吉日の名もあべし。

節會がよ。まわの法よりみよあらむ。つとめにすられ  
きあるの。さりあらむ。佛の心もあらむ。つとめにすられ  
きよ。まわ。おもひよ。おもひよ。おもひよ。おもひよ。おもひよ。  
かくべまるとおもひよ。よじよやつぶ人の。さりうりうりうり  
りうりうり。おもひよ。おもひよ。おもひよ。おもひよ。おもひよ。  
人。よもよよ。おもひよ。おもひよ。おもひよ。このもくうらうらされいで。  
用毛け。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。  
人のうらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。  
うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。  
うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。  
うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。  
是うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。  
五月の法ほうの御もだ。

年十二月五九日精進法事也。長安延喜有。豈男女  
等修年三戒。忽脱諸難等。獲殊勝福利。  
玄冥職也。  
あまふたけ。すよ。やりごめのま。よこまうち。あまふたけ。  
本尊安置の事處。し  
あまふたけ。あまふたけ。

移宮院在說塗筆を帳幕のやうてかく支。文庫ジニで  
の盤ハシ和考ハコを乞うのひより

五音  
朝日よすめりと。すめりとすはれくのゆみ。時名のとゆみ。  
清少納言著

けりとよとよせきてわれもくとゆき。おもてのわくよくか  
くやくれりこのわくよくとあく。よくせくらどきくとし

賀茂去玉都北一里山麓タケマヒタタケノミクニ在室日カミヒタタケ別雷皇太靈  
うれりよん。日がくふきとくのとく。氣をひく。宿スルとく  
人ヒトもあり。ちくらくあるのり。車カミヒタタケあるのり。事ハシ  
大正書道 翔平門下  
かの陳カミヒタタケとす前カミヒタタケとどかくとく。人ヒトはるご  
かりり。拾苔縫殿陣カミヒタタケ門宛カミヒタタケ陣

延喜式カツラギシキ載カツラギ輦車カツラギ出入内裏者ハハ妃限ハハ曹司夫人及ハハ内

親王限ハハ溫明後涼カツラギ後カツラギ三位限ハハ告謹陣カツラギ但候カツラギ女官及ハハ

孫王太トト端カツラギ高カツラギ素カツラギ輶カツラギ限ハハ無謹陣カツラギ

ゆみ房カツラギのうやまへりて。往カツラギいゆひ。のとく。おとくをきく。のとく。つるや  
ねわせくねじ。國カツラギもつねだかきけあるとこあみて。ゆくよ。う場  
とよすりて。人ヒトわくとく。がくすすくとく。

河湯抄カツラギ左邊カツラギの邊カツラギ者カツラギ一条西洞院右邊カツラギの邊カツラギ者カツラギ一条  
東カツラギ北野カツラギ社カツラギ南カツラギ北野カツラギ場カツラギと云  
ふづへて。ゆのみわたり。云ば。由語カツラギと云はカツラギ。

くあふどめり。

袖中枕五宵。二日を左より。三日を右より。四日を太近。五日を結也。五宵  
を左より。三日を右より。二日を太近。一宵を結也。射手  
の山瀬。主人水テ移ス。うちゆひ。禍の後。を。や。のゆ。か  
様。引出で。そのよ。しづば。を。被ゆ。や。あ。い。の。日。お。お。の。ト  
の。け。ぬ。滅。め。ら。ぬ。と。よ。く。う。と。め。け。ど。う。ど。と。け。ま。く。  
禍の尾。神勝。うち。筋。を。あ。よ。引。あ。ゆ。く。前。よ。は。さ。め。り。ば。い。ど  
この處。て。づ。れ。り。そ。じ。き。の。り。く。ふ。や

列傳より。江戸守り。中おも高人。  
在途中ねまかはとそひのほとくどもうがんとそば。おほきものあり  
さゆうつもゆうへぬう。そげやすとよとて。りもと並びもから  
道すも。  
本のうりをひかへる。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。  
本のうりをひかへる。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。

高階灰條口立

成忠助頌信頌明頌

成忠助頃信頃明頃  
安定子の宿每言内侍兄也  
者累也  
事殺

禁中ひ下侍其靈あらまよ。三形ひ障子所。禁秘抄み三形号  
波裕馬也。うやうひ事城うごく。障子うごく。

ほの屬風。ち先山里の山腹に洞窟ある。定毛の事より、かねて画面を張て、うそと細く。といふは、

あめや。あらの屏風とひめ  
實九利のままである。なれど、  
かうのすれきよしのうけは、あれど、あれ



1

是もやくは  
はゆ。はゆのゆかみゆくも。あくがゆうらむお。ちう。  
其房連の詞也  
さゆれど。かくかくやまんや。このくのむきをゆく。  
こよみをゆくとやまく。なまくわくとく。  
遡返  
行あゆ也  
京近と

松芳云、不系院、一章南方云、  
この爲光伸号恒徳公ト

勘物。公信。恒德公。六男。幼謙德公。長德元年九月十九日  
停。延十九四年十月。參。諱。作。長保九年三月。少納言。同年九  
月。右少將。世子。二年二月七日。薨。禁色。  
正光

物語の事。物語の事。  
あらかわ。まことに。あらかわ。まことに。  
復め。おおきな。おおきな。  
土浦門。正觀町。南。  
つらみ。結。宿屋の僕達が追來也。  
そらのまよひて。あはれ。とまもふ。  
えげむ。もの。けふ。でも。うちめむ。  
けうふ。ゆゆゆ。ゆゆゆ。ゆゆゆ。  
もと。あらかわ。あらかわ。

延祐式凡乘輶出入宮城門者如以下大臣婦孺以上限  
宮外而住已下及內侍者聽出入門但不得到障下

考古書院をへるより三面の長者町である。

卷之二

侍讀子

九

はすりのゆきみどりく。行ひせむ。宰相のまつま  
宰相題  
多首  
雷

とくに休む所をもつてゐる。まことに、おひるは、おひるを  
驚

格の上ニシテラ下ニタセ也  
あまのむらうへそ。あみゆをみくらすありて。まぐらがよ  
リニクルニテラ。ヨルニツヒラ。ヨルニツヒラ。ヨリニ

和名部周礼注云。部音部亦善。覆暖障光者也。  
雷雨

事の如きもせむ  
なりとて是れを以て車馬と云ふ  
其の如き

又高き事無事  
久々上を御すと云ひゆるはあり。絶ひつゝば。みだり  
雷奏おも  
將軍名前をて

アラタニシテアリ。アラタニシテアリ。

唐向  
あをまくよあぐるんのをもと  
ひきつまうすとアモア  
ナテ是チ留鳥名トシキヨウモヘイハ行

مَنْ يَرْجُوا

卷下

上卷

廣雅

おもんとてうらむかくしはくまほのとわきあひ  
へ。すがやがまやねくおきるさゆ。もしやよよか竹  
取物人  
后漢

あんなものがあつてよくやれど。まあやうゆけいすにや  
あせりて。でもあくまでもよわいよもいはざとの  
居間

トモシテアリ。アラヤナリ。ハタチタガリケル。  
廬

拾落多庚申人腹中有三戶為大害嘗庚申之夜上告  
天帝記人罪過絕人主籍庚申之夜不寢則不收上天

庚申の夜人皆ねづひてひよるが酉陽雜俎子  
ルヲタチ  
守庚申則三彭減の説あり。是よりづきあはれ。紫雲氏

イ庚申セテ復陽絶文

舊公居用意  
内を長久の所へて、あらかじめに、

題出でや房す。すよを以て、もとからうそひをすり、

まの内前よりも、まづひく。ものいへかだ、やうのむねと、内後

トくさうをよどけて、けるはるか、あらわとの、まよわ。

トくしきつて、多くまづくがて、りび。やまひけ、ゆくべ。あらわ

うくやうや、まゆゆく、店主の所をゆきゆきと、

かか奉。あらわの所をゆき、やを伝ふ。おうそゆめを、ゆき、

内大臣の清少の題。庚申

まくわう。よくあくせくと、う。うと、よあくせ、せめううけを。清也

よう國す。まくわう。あくせくと、よあがく。よくあくせくと、

え浦のらと、いふの、おとしもやうめを、まづくと、

とある紙をかふ。おとお事であるひがみ。いだきわざと、なふ

内大臣

山翁言事

その今がほといふぬりやうば。おとひのすきよくとよやうし  
かじまつた

しゆくのまづびく。おきまくらむ。うきまくらむ。うきまくらむ。  
店主の

あいつ。ほくくまんじく。うべうべ、ゆきよんむかわく。おままで提

清少の  
内のけらよどりかうて。や房のものがちて、わくよ。おのゆあげぬ  
清少学をかみゆ。第一をすぐあり下を落すり

おとづる。うきまくらむ。おとづるやうのや題あくびをいふとげお  
絶す。五画の筆のがわきとおはめで、とくとくして、とくとく。

御まつりばき。ひよみかみさん。あいとうりやまし。ひづせむわん。  
第三章  
二二一にてをふゆるわん。一りて休わんまこと。一のほりと  
人々よみがえり。

法華經三十方仏中唯有丁荼法無二亦無三除仏方便說  
筆うみあらうあはく。九品蓮臺の中より。九品といふもよ。す  
て多々ぞ。

極樂寺建立願文 保治 十方仏土之中以西方為燈九品  
蓮臺之中金下只註定

鉢經は九品の淨土をそ。上品中品下品のがうゆ  
居高禪

人ノ一歩こづゆ。行んとこそおもれどおゆす。行もゆく  
是う別陰家也。居高の方

中納言後事多勞とありく。はあがまをむかひる。陰家とつみ  
一牛はね被をあけられ。まほせんとす。かが  
おもひあは  
わけのうえ。もとかまげけまは。かくめ仰くや。よしゆめよ。威。い  
居高禪

詣月一名水母和居久良が貌

月在海上故名之

增賀上人詩

高麗に十載の老の眞油日の初のヨリのまゝに  
あらわす事。ことはういふもの。うちよのまづはざくら。  
是又別の事。あらわす事。ちゆうじゆ。中宗在世の事。高麗  
あらわす事。ちゆうじゆ。ひだりをさし  
あめのうらげ。あらわす事。力ある。ほつてゆる。或報のせうぶ  
はれ。中宗の勅使を

藤原信經室中納立通補の曾孫雅正の孫陸奥守為長の  
子也勘物。信經長徳元年四月十一日藏人三年五月

三

基上三不居多至アタル也

月日書  
小経詞  
わくもわくも風不くとてわくもあらかの涙不く  
菌がんも  
ひごつまく。いぬがくまうげよけりうんとく  
清少の香向詠(古調也)  
緋不裂(清少翁詩也)  
せんせきをうみをも。あめに子供。おもおもよ

武部亟

韻語科和名ニテ、韻語也。今坐毛亭也。

の事は承う。何ぞアリテキナリ。御子也。シテアリ。モトトテ。  
前既も自賛の事。アリ。シテ。自賛あれ。ヤ

是又別ほのもので  
けやうやうかくまつりのあよ。おゆふくらう  
大后

勘物方中宗安子康保元年四月廿四日崩入三十六

右丞相師輔女子 中官從三位安子母同金家邦綏女

村上居冷泉園融母居天慶三月八日居天德二年  
十月廿七日應和院

みのうへて、やがてのうからうのはうのうへて、

故物以柄  
廉保五年五月廿八日差謹司元參庫移東家  
大進天延二年六月摺付後回位下長德三年五月二日  
御人參部力補役補<sub>ル</sub><sub>モ</sub>收物而別焉

アリタニ無事の事よりの心事あり。アリタニモトノカタナカタナヤ。アリタニモトノカタナカタナヤ。  
アリタニモトノカタナカタナヤ。アリタニモトノカタナカタナヤ。アリタニモトノカタナカタナヤ。

さて顎山のさん。かまくらもうへんとつぶし。げよさをあらゆ  
る。ひくいさんすうのじゆう。ひくい事。ひくい事。  
詩情の説  
著者  
一音子ハヤシ

あらう、世人のやういふにすむべからんやうな手紙  
是よりは、まことにあくまでもあるとよ。まことに  
ほもとの別あずから

拾芬之作物，而在進物。所西有別焉，移就食。

考云肉裹仙洞より太股門を遡門のすれ方也。其の物折り作寫

造物貿用

あはりとおちげるもあん。おのなやうを聞く。わがやうに聞  
筆記  
筆記  
筆記

真字  
本續御文書  
清の  
事

是、極めてその間  
の事。おまかせす。  
時々のちを傷め。情事の去し初め

卷之三

立候也。又上者才之任人，下者才之使事也。

是ち又別體也 三季の院乃も

歌意今東宮より承り  
定義也

正月十四日  
後宮へお出での事

中止の事。二月十九日。宿泊の所を改めさせ

居候のうらやま  
宿居のうらやま

かくも。あが用ひよ。おとづればわざわざひそめづ

あてありぬ。どうふざのひめれすとよ。ほふづれをよむ。

勸物去信涯記云二月大相處登花後仰掃部  
カモリノツク  
春

其物之有無計之二月廿日酒會登拜後依機音寮叢  
卷道序初始為吾生川慶抑頃中將家言明正當節又

遼道年刻懶耽隱未到渡濟頭中將義信朝長持衛

於南翥者何辰。至酒事申刻還御。  
中風字也。十日卯。

はくめのゆきかくしゑわくであつまく夜

上六中孚惠心勿

ひのくに車うて多珍ひよくわ。家をほらうしれどもみよ四尺の屏風画

事へてあら。おまかで。ゆめゆめねうむんで。おおお。

げりとあがむ。古屏風の南。古帳のまへア。や戻れよおとぞめどる。

卷之三

絵ば。まよつて、積善寺供養の日。

葵花

又えてね事の參る。板政のは無院のまゝ。別れ直堂あてさせ

絵ひて、積善寺や、なづけせりて。あは直堂供養つゝに

を絵

かの  
ゆうく絵わけるをまゆい。あはくと屏風のまよふとす。

底あは

わざくわらみまふるよ。まうは「青店」がやのまよす。うるさ

青少

ありくべつしや、あは楊のまよん。うそとんばゆをども。くわの升乃

屋紋

うきゆうを三毛ぐりア。あが引きねてすりてあは楊了。あは

張起

きぬと御くわし。あをむ極くともわゆべし。あはまきざきの

の

まよふばくわらみがくわらぬや。あはめくわらぬやとのまとす。あはめくわらぬ

の

あはめくわらぬや。あはめくわらぬや。あはめくわらぬや。あはめくわらぬや。

人をあはやけ。あすじとせゆ。あまでいはうつ。せ絵ひめくわらぬや。

後事

お屏風ア。まよつまくのぐく跡ア。うーうめてまよくわらぬ。國をばは

高内侍御

人をあはゆ。お障まだひあわまく。あくみゆうへきーうす

ゆぞくも。おのこかく。あらげくわらぬのまよら。あらげくわらぬ

きよゆ

て。ひーにきてア。れひすれ。あらげくわらぬ。あらげくわらぬ

きよゆ

て。ひーにきてア。れひすれ。あらげくわらぬ。あらげくわらぬ

きよゆ

ゆぞく。あくまくわらぬ。あらげくわらぬ。あらげくわらぬ。あら

げくわらぬ

あらげくわらぬ。扇波はくはくし絵。よのあじくげよめでく

桂

ゆぞく。あくまくわらぬ。あらげくわらぬ。あらげくわらぬ。あら

げくわらぬ

あらげくわらぬ。扇波はくはくし絵。よのあじくげよめでく

直衣

うほくとくわらぬ。扇波はくはくし絵。よのあじくげよめでく

道金

ね。紅の御、うららか。御ひえいもくらのぼつうす。うらら  
情のゆき方。  
うららとあへじみてたけまづ。めでてとおほひをあどもば。うら  
道陰の。  
ゑみて。きいれどりれど。従せよおひそむびくとのゑりつきあやう。  
うららげよとおこせひ(高)。まことやすりみ。いはほー柳もみがさ  
行(高)。おほひそむの。みゆひそむいわせひ。行あくいきい  
うとうやみくらせゆ。ほく水と争ひ。のめよまぜんようごん貞親及  
承とまく。

宣櫂殿 麗景殿北 常寧殿北 俗曰脚医殿 在是殿

七間四面 貞觀殿

常寧殿北 俗曰脚医殿 在是殿

わらはすらふもよほくはへー高。とて系ゆめり。うららのくらの廊  
すだ。や房古人ばだりまく。ねせはくらくらはほかうりて。みゆみゆ。

楊(右計)れくよもよとよお楊(左計)れくよもよとよおみあぐる引てとらり。す  
はつすすむひよめ。がのむのくらきぬども。うがいで。すらさ  
のむりれみのひす。がねの君。小野のくら位のひす。寧相のくらままで

管原補正。勘解由長官在躬。一男現神。北野殿是也。正暦三  
年二月十五日叙三位。外御補佐

近習(高)。らくもあくらむれ。うららか。うららのゆゑねむ。春の采の  
水の春也。

夢秘抄云。陪膳。宋也。典例御宋也。熟御也。  
沙泡事也。陪膳。宋也。典例御宋也。熟御也。  
もすくらむ。うららとくね。うららひひかべーて

和名裾裳。裾帶同。背子。和名形如半臂。無襫。袴木也。山

青霞(高)。家(高)。也

和名裾裳。裾帶同。背子。和名形如半臂。無襫。袴木也。山

眉すほぢるを貯也

宋文

詩

これてあだつやあくと。づばくすゞどりにまくよまかが。まむけふ  
云ゆめこと

あうやけしうもめにてたれ。

お膳

時

どえまうあいひくみあがてあすすふほよ。なまこもうちす屏風もす

あげつね。清少の福間見

屏風

とくえ

とく

みすと木下にすて。げらのむとよひで見え。さぬのすきえりど

も。さかみいのまきりを。おまかせとば。庭のはのまよりはえ

ト出で。さかみいがす。あゆより見ゆらわ。とあるとせゆる

近隆の内也。

ト

古を君し。がうみ酒也

山鶴かすとのまよひのまよ。とそとへと高きうし。  
か納言がもの。とどけて。あがめんとトはせじ。とおかげ。とくえ

御意

見

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

國白板

お君作道隆の孫也

魚へはく。火へはく。これら沙汰を。ばくよすへあく。あく。いとろう。や

あく。おせきの所行ふるのとく。そねあだ。引く。まく。大

納言處を。あく。さうきよむ。中納言を。いとく。しも。づまを

めく。さく。体ひんを。あく。後とばさん。あく。うの。ほす。せーと。め

あく。おやく。あく。かく。沙汰を。ぢん。つと。ゆく。

ゆく。おと。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。

ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。

上高内侍 富田

早膳を。あく。

坐を。あく。

起を。あく。

寝を。あく。

食を。あく。

便を。あく。

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

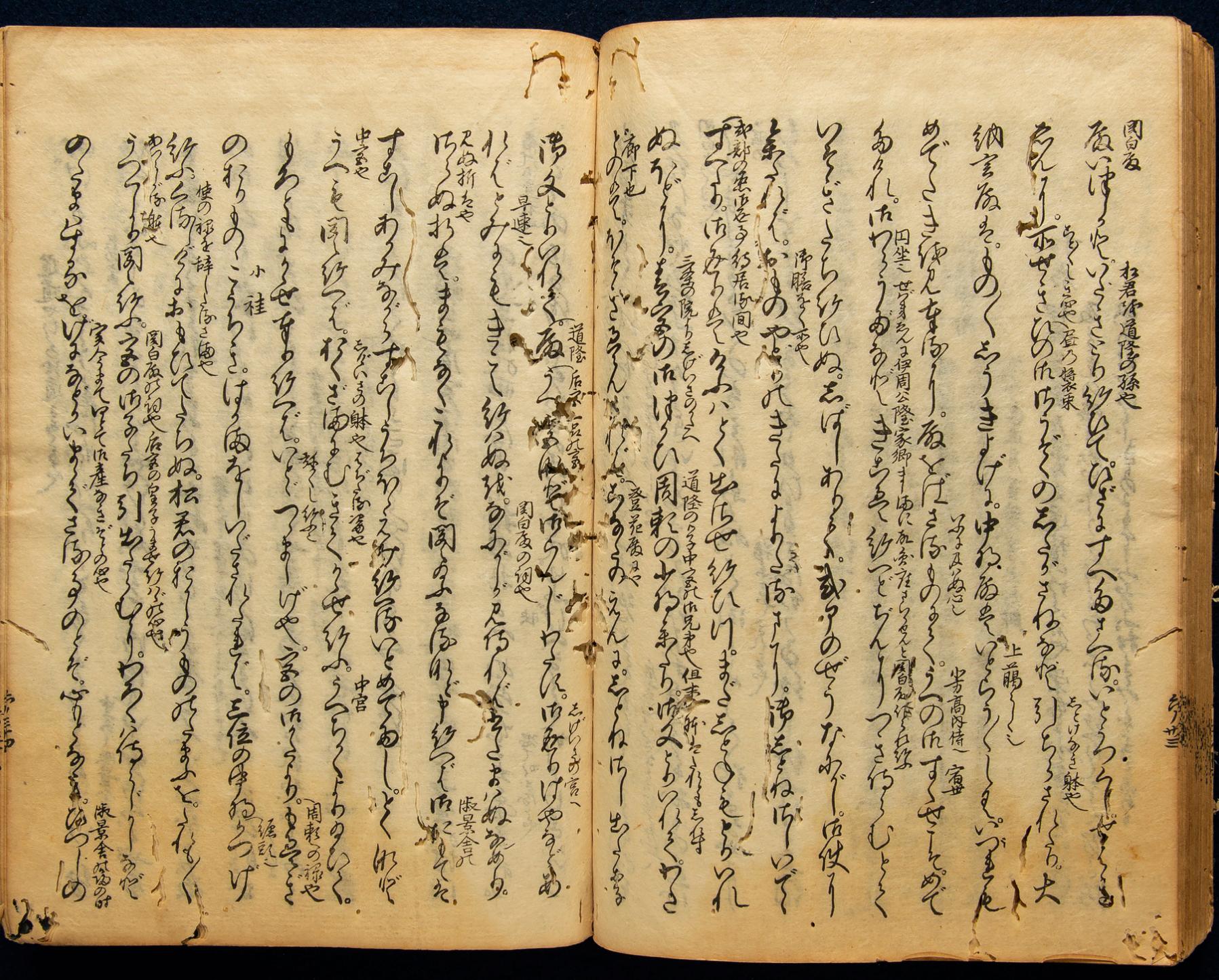
の

の

の

の

の



延道せり。延道をもよや  
せば。のぶ。あん。すう。と。延道。せり。かく。うら。そ。と。ゆめ。  
一品のま  
あ。あ。す。り。つ。せ。り。ひ。ね。や。う。て。ゆ。懐。み。つ。せ。り。で。や。房  
毛。面。お。ま。よ。三。射。を。よ。あ。き。を。ぬ。め。が。ら。う。よ。房。上。人。も。お。う。る。板  
の。た。も。う。ま。り。こ。め。く。う。ど。あ。け。く。め。く。人。く。名。つ。せ。時。お  
幕。を。寄。て。旅。を。と。お。む。と。ゆ。く。  
因。せ。く。あ。じ。く。う。か。か。ひ。く。や。房。じ。お。び。れ。か。に。だ。が。く。ま。く  
あ。い。と。お。ひ。く。あ。り。の。ゆ。か。く。り。あ。い。さ。は。せ。り。く。や。ま。の。荒  
ひ。ぐ。お。ま。ま。の。え。  
大。納。を。う。く。や。う。き。あ。り。と。ゆ。の。く。く。ま。よ。

道頼公也。后主任周公別駕。凡克東山。并得三重門。

の如。京極の西か。拾參抄もその家を主とす。其處にあり。

古事記の一篇の文書をもとにして、この方角

は同名で  
三つも西行の歌。世の人をせらうとお門を二つあると

シテナリ。名大納言。山の井の大納言。三位の守。内侍の守。内侍に

内花紙道隆先生也。軒親の御意叶ひ。葛原系口語

黒崎大和守・其孫に傳て  
徒五立下伊賀守方基<sup>ミサキ</sup>、前防波守正弘<sup>マサヒロ</sup>の兄弟也

居まつておひそかにせぬべしと  
御内閣のいえの詞

の事は、さうやうだ。まことに、おほくひよきうわら  
東京の旅館女房（らうふう）

かくはくとくばく。ゆきのうきのうの侍従がくも年高ぐく

卷之五

愛の字

后宮の御年方と、慶賀年会とおもてのうす年会とや  
あづまちの宝のつゝく國へゆくと

を鳥のやうに。まことに、おおむねが、

1

別院のより又夢の脇乃財主を

清少納言

亦の處にてとあるあらわ

六言

朗誦大庾之梅早落誰知移紙言之序也

序也

卷之三

一時  
行狀

の事は居人より仕合ひを爲すの所前よりは  
あくまでおもてなしの心でござりまじめ。所事は吟詠詩  
かうしておもてなしの心でござりまじめ。所事は吟詠詩

5

シテアリ。言フシ。

卷之三

軍大納言公任小孫。尊室實賴孫。從一位圓白。大納太白。賴忠子  
才大納言。正三位能登和淺才士也。康保三年生。万芳三入道。  
もくしきよ。ナミノミタニシテアラモアリ。雪のやうなて素すらきや  
け筋体後塵たどる。ナツアラヨナシテアラモアリ。ナツアラヨナシテアラモアリ。

唐詩  
古事記  
清少納言の句  
「花の香と春」  
「花の香と春」  
「花の香と春」

處で考へ  
讀少司の句うるる一仕事と考へ  
清也

ج

公猶補任田。之後賢。率才紳。

高明公三男也。右大臣師漸公。

三女長徳元年八月廿九日參議從同位下。右吾漸猶也覺  
嘗侍の事よりを惜しきを度せ  
りゆきのよし。あわからんと。どうごめぬひと。うがく。吾家のすげ中  
少納言のあるを終りしを  
わゆるもおけや。がむりひひ。

清少納言  
清少納言  
清少納言  
清少納言